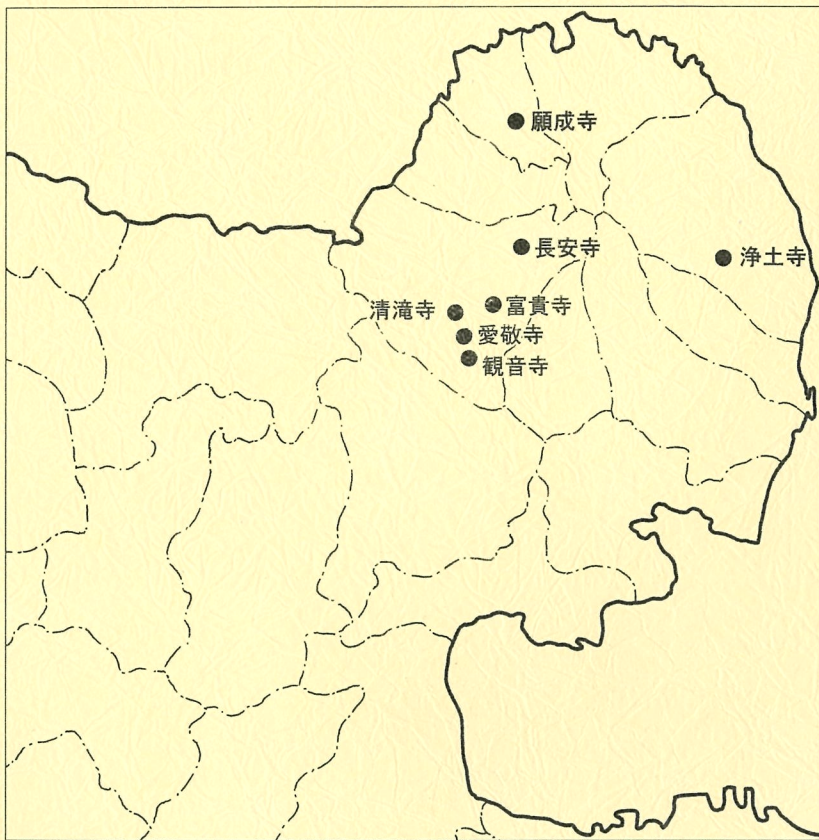


六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ

浄土寺・願成寺・富貴寺・清滝寺・愛敬寺・観音寺・長安寺



2001

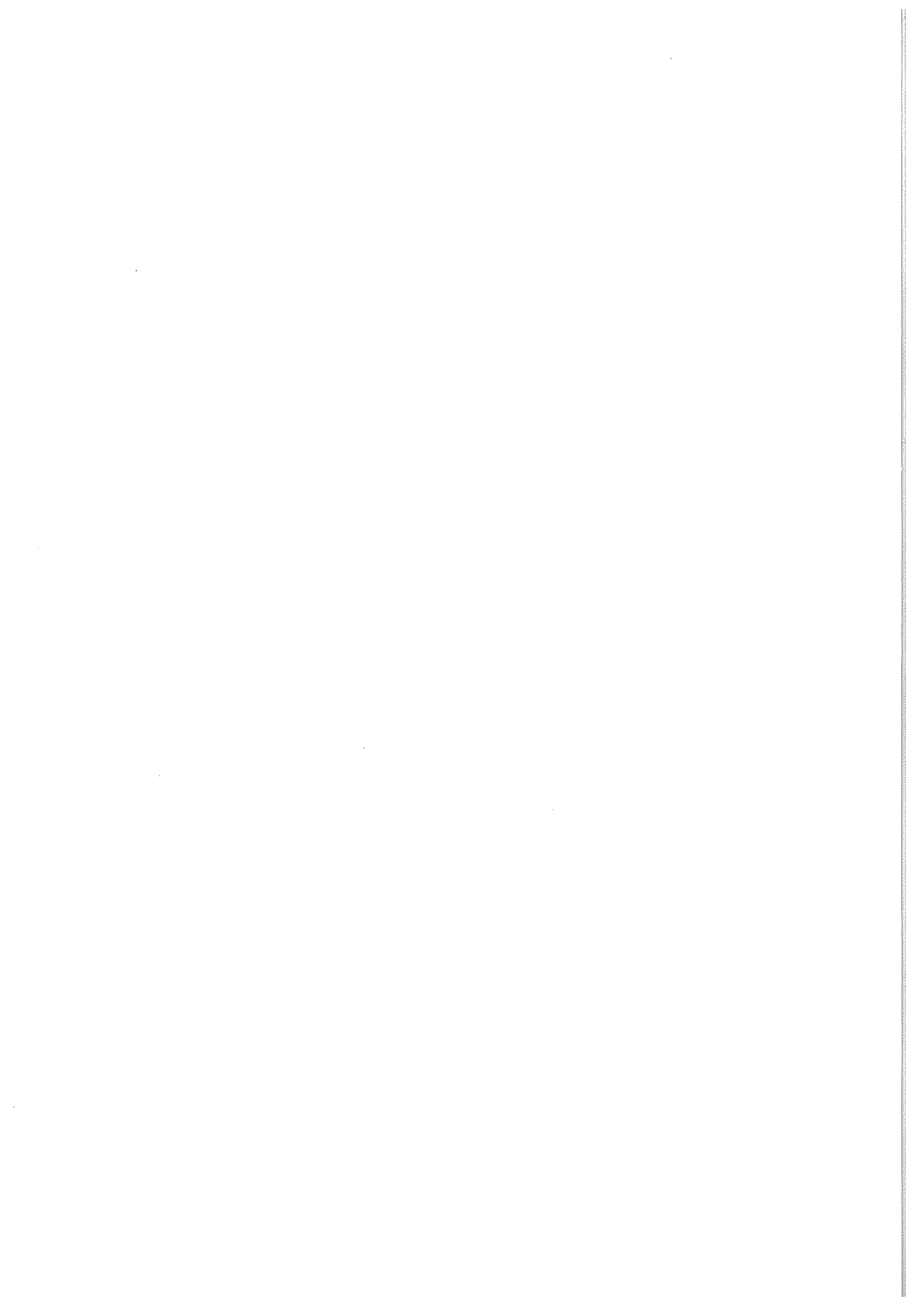
大分県立歴史博物館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ

浄土寺・願成寺・富貴寺・清滝寺・愛敬寺・観音寺・長安寺

2001

大分県立歴史博物館



序 文

大分県の国東半島一帯に点在し「六郷山」と総称される天台宗寺院は、古代・中世に開かれた山岳寺院です。

これらの寺院の中には早くから廃寺となりその位置も不明となったものも多く、ますます加速する過疎化などによっても関連する資料や情報が失われつつあります。当館では平成4年度から平成9年度にかけてこの六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきました。調査を終えた寺院は64カ寺の約6割に止まり、全てを網羅するため平成10年度より継続して調査を進めることとなり本年度で3年度目となりました。

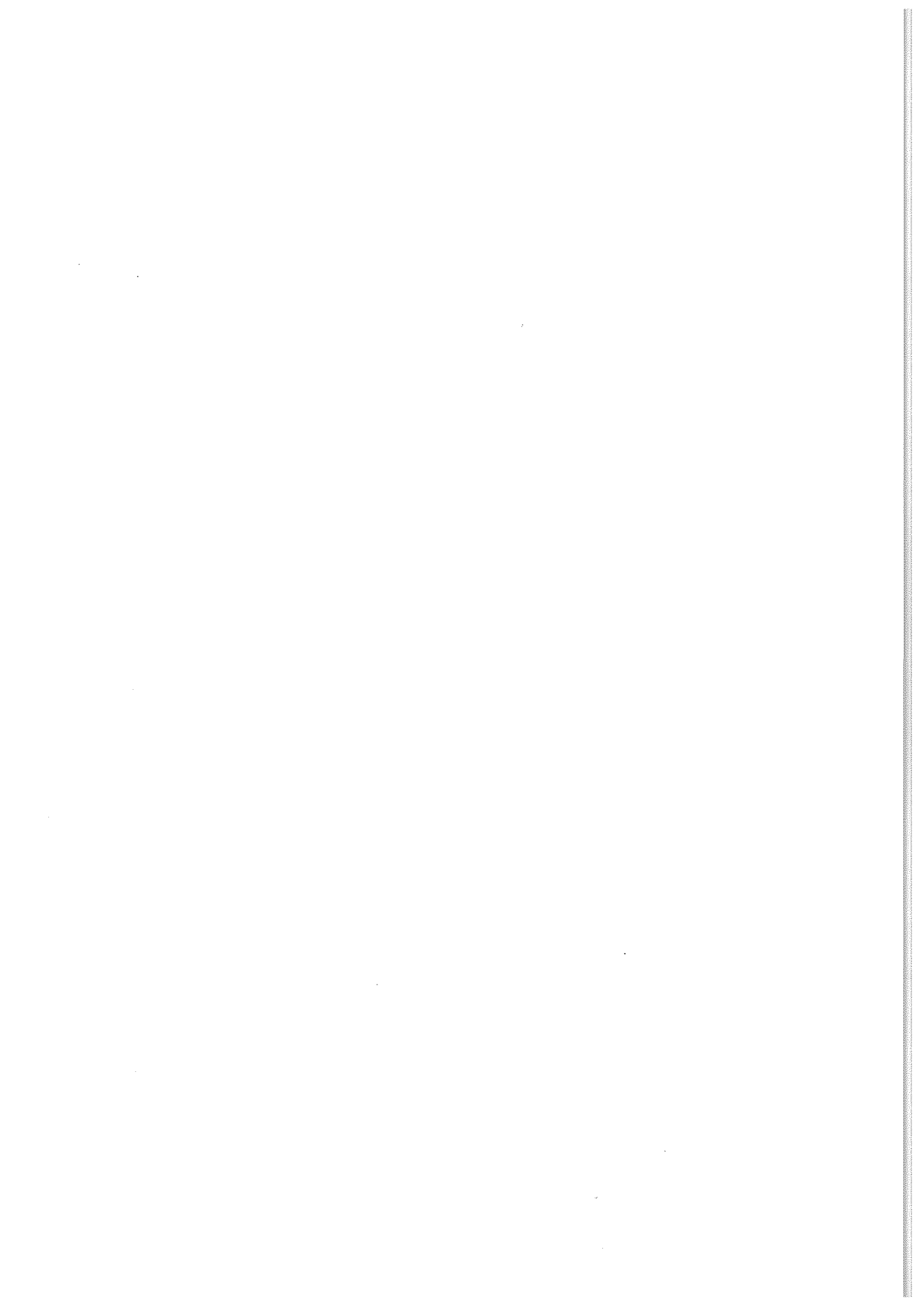
今年度の調査では、国東町浄土寺が室町時代に禅宗寺院にかわったことが判明し、豊後高田市長安寺講堂跡や富貴寺周辺の石造品に新知見を得ることができました。

当館では郷土の豊かな歴史と文化を次の世代に正しく継承すべく、各種調査事業を推進しております。本調査の主旨をご理解いただき、ご協力を賜りました各寺院・関係者及び地元教育委員会と住民の皆様方に心から感謝しお礼申し上げます。

平成13年3月31日

大分県立歴史博物館

館長 岩井宏實



例 言

- 1、本書は大分県立歴史博物館が平成12年度に実施した六郷山寺院遺構確認調査の報告書である。
- 2、調査は国庫補助を受けて実施し、平成12年度は以下の7ヵ寺を対象とした。
国東町 浄土寺 末山末寺 香々地町 願成寺 末山末寺
豊後高田市 富貴寺 本山末寺 豊後高田市 清滝寺 本山末寺
豊後高田市 愛敬寺 本山末寺 豊後高田市 観音寺 本山末寺
豊後高田市 長安寺 中山本寺
- 3、調査を実施するにあたり、各寺院の住職・総代および地元教育委員会と住民の方々の協力を得た。
- 4、遺構の測量・写真撮影・製図は主に宮内・堀があたり、石造品の実測・撮影等は当館各調査員が行った。
- 5、本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を宮内が第三章1を櫻井、2を渡邊が行った。
- 6、本書の編集は宮内が行い、堀の協力を得た。

目 次

第Ⅰ章 序 説

- 1 調査の経緯
- 2 調査組織

第Ⅱ章 六郷山寺院の調査

- 1 国 東 町 浄土寺
- 2 香々地町 願成寺
- 3 豊後高田市 富貴寺
- 4 豊後高田市 清滝寺
- 5 豊後高田市 愛敬寺
- 6 豊後高田市 観音寺
- 7 豊後高田市 長安寺

第Ⅲ章 調査の成果と課題

- 1 近世六郷山に関する一史料
- 2 富貴寺およびその周辺の石造物 — 中世麓谷における信仰の変遷 —

図 版 目 次

第1図	六郷山寺院の主要分布図	1
第2図	浄土寺位置図	3
第3図	浄土寺境内実測図	4
第4図	浄土寺住職墓地実測図	5
第6図	清滝寺位置図	7
第5図	願成寺位置図	7
第7図	富貴寺・南坊位置図	8
第8図	富貴寺と南之坊跡	9
第9図	富貴寺南之坊五輪浮彫碑・板碑実測図	10
第10図	其ノ田板碑実測図	11
第11図	西田平地蔵堂西磨崖梵字	11
第12図	愛敬寺・観音寺の位置	12
第13図	長安寺位置図	13
第14図	長安寺境内図	14
第15図	講堂跡実測図	15
第16図	講堂跡出土小皿、坏	16
第17図	露谷主要部の社寺・堂・坊跡および石造物の分布	33
第18図	富貴寺と六坊周辺の石造物	34
第19図	磨崖阿弥陀種字（拓影）	36

写真図版目次

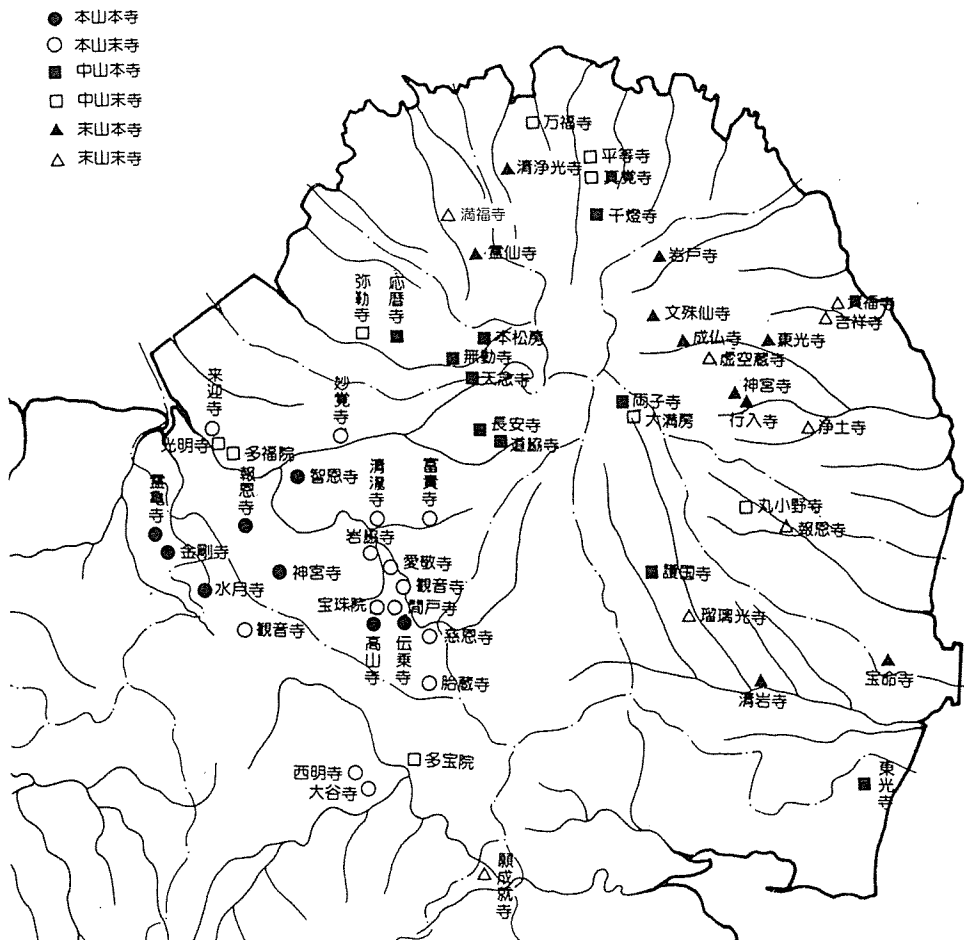
浄土寺住職墓地	5
浄土寺全景	6
同山門跡	6
同石碑	6
富貴寺南坊墓地	10
同	10
富貴寺十王像	11
南之坊板碑	11
講堂跡と六所権現社	16
講堂跡全景	16
富貴寺笠塔婆	35
富貴寺十王石殿	35
其ノ田板碑	36
西田平地蔵堂磨崖仏	36

第 I 章 序 説

(1) 調査の経緯

大分県の西北部を占める国東半島一帯には、古代から中世にかけて「六郷山」と総称される 60 数カ寺の天台宗寺院が所在する。この「六郷山」寺院については堂宇の建築学的調査や文献調査はこれまで行われていたが、考古学的調査はほとんど実施されておらず、寺院の規模・伽藍配置・遺構の状態等の詳細については不明な点が多かった。本調査はこのような六郷山寺院の全体像を把握するため、現状の記録と併せ寺院遺構の存否、遺存状況、寺域などについて確認を行い、これを図化し「六郷山」寺院の研究に資するとともに今後の開発に備えることを目的とするものである。

当館では、その前身である宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の平成 4 年度から平成 9 年度までの 6 年次におよぶ六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきた。しかし、すべての寺院を網羅できず平成 10 年度からさらに継続して調査を実施している。



第 1 図 六郷山寺院の主要分布図（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）

(2) 調査組織

調査責任者 大分県教育委員会教育長 田中恒治

調査委員と調査員の構成

調査委員	小田 富士雄	福岡大学教授
	関 秀 夫	大正大学教授
	千々和 到	国学院大学教授
	後藤 宗俊	別府大学教授
	佐藤 正彦	九州産業大学教授
	飯沼 賢司	別府大学教授

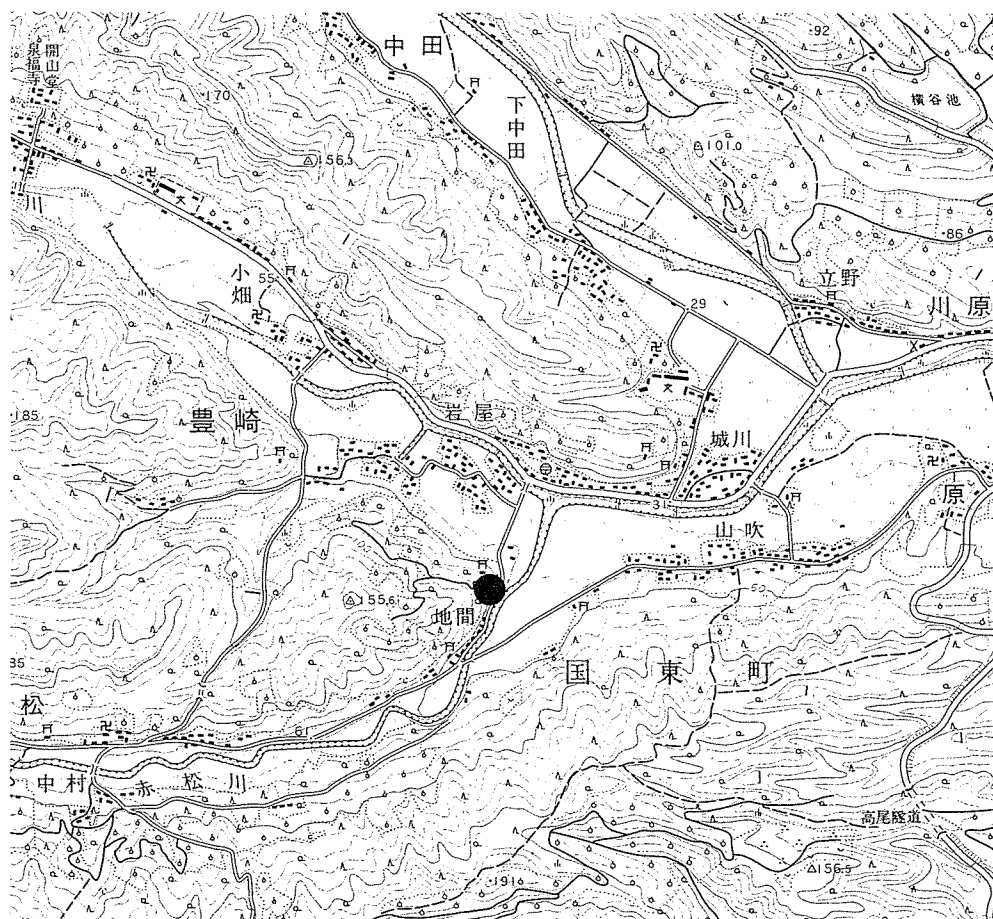
調査員	岩井 宏實	大分県立歴史博物館	館長
	丸尾 輝彦	同	副館長
	真野 和夫	同	副館長兼学芸課長
	渡邊 文雄	同	調査課長
	高橋 徹	同	主幹研究員
	山田 拓伸	同	主幹研究員
	宮内 克己	同	主幹研究員
	菅野 剛宏	同	学芸員
	櫻井 成昭	同	学芸員
	平川 毅	同	学芸員
	堀 優子	同	嘱託
	渋谷 忠章	大分県教育庁文化課	課長補佐兼埋蔵文化財第1係長
	吉永 浩二	同	主幹兼文化財管理係長
	金田 信子	国東町教育委員会文化財課長	
	河野 典之	豊後高田市教育委員会生涯学習課技師	
調査事務	阿部 正敏	大分県立歴史博物館	総務課長

第Ⅱ章 六郷山寺院の調査

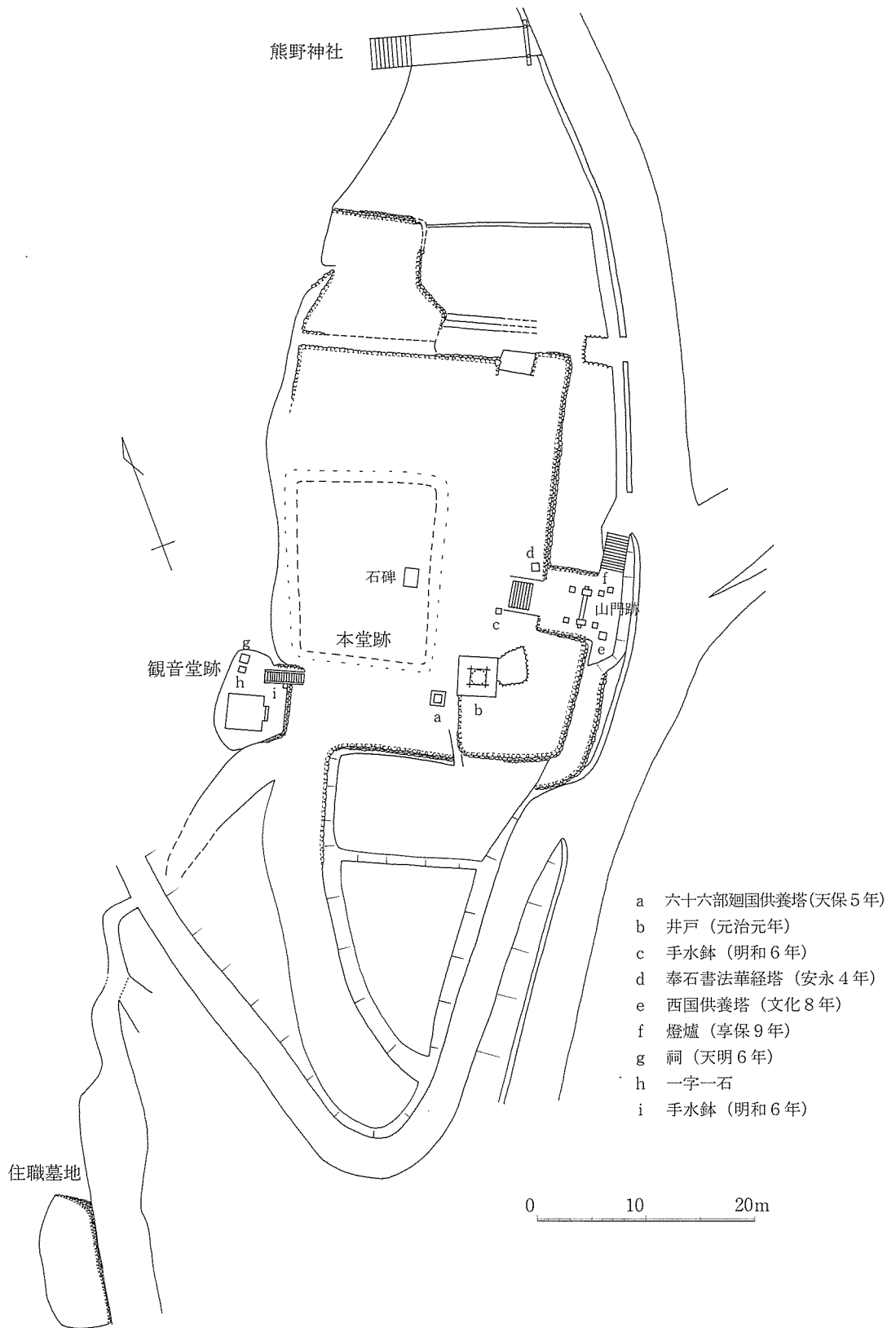
1 浄土寺

浄土寺は国東町大字岩屋字石仏にあり、田深川の支流赤松川の左岸の丘陵裾部の一画を占める。建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至注文書』（永弘文書）に、末山本寺行入寺の末寺としてその名が見える。その後、江戸時代の『豊後国六郷山巡礼手引』には「百六拾六番 岩尾村 有住禅宗・・・」とあり、江戸時代以前に禅宗寺院となっていたことを示す。

現在は無住となり境内に堂宇は残っていないが、檀家は大字中田の曹洞宗東光寺（住職 丹羽秀道氏）が引き継ぐ。境内跡の中央に昭和48年4月に檀徒一同により建てられた「熊野山浄土寺之跡」の石碑がある。これには「当山は約600年前養老年間初代蔵山融沢大和尚の開創で／第二十三世熊野御堂月譚和尚に至る代々の和尚が当寺に寄／せた功績は偉大である・・・」の銘文が刻まれている。蔵山融澤は永和元年（1375）に当地に初めて曹洞宗寺院（国東町泉福寺）を開いた無着妙融の弟子であり、室町時代初期に禅宗寺院へとかわったことを示す。



第2図 浄土寺位置図



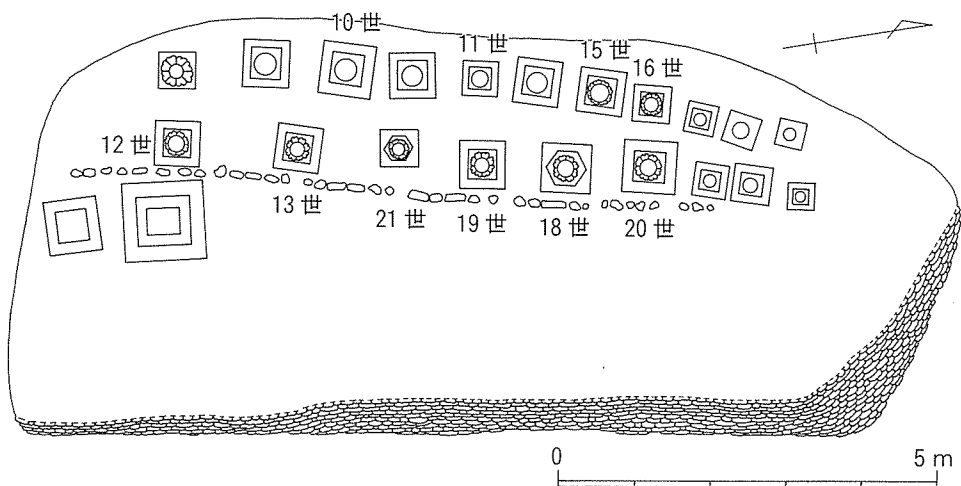
第3図 浄土寺境内実測図

参道は東を走る町道から入るがコンクリートにより覆われているためはつきりしない。山門は破却のため建物は残らないが、清掃したところ礎石が検出され東面する四脚門であることが判明した。これを過ぎて石段を上ると西側丘陵部を除く三方向を石垣で区画された境内に至る。石垣は東側が高く積み山門周辺とその北側は丁寧な切石積みをなし、南西隅付近は二段積みとなり下段は地形に合わせてカーブを描く。境内内部は山裾に沿って南北に細長く造成（約 25 × 35 m）するが南東コーナーは約 4 m 余り突出する。中央奥のやや南寄りに約 12 × 16 m の長方形の本堂跡と考えられる基壇状の低い高まりが認められ、その南西奥を登った所に観音堂跡がある。南東部には元治元年云々銘の井戸跡と天保 5 年銘のある六十六部廻国供養塔が、山門跡や観音堂跡周辺にも 18 世紀後半以降の年号の記された石造品が残る。また、境内の北西部に隣接し台形状の区画が形成され江戸時代にはここに庫裡等の建物が設けられていた可能性がある。

住職墓地に至る道は、観音堂跡の南側から南西に続くが現在は林道により切断されている。墓地は山の斜面を幅約 5 m、長さ約 10 m の長形状に造成し前面に石垣を積み、その西半部分を石列で区切った内側に住職墓碑である大形の無縫塔と小形の無縫塔が二列に並ぶ。後列南から 3 番目の十世から前列南から 3 番目の廿一世までの代々の住職墓碑の配置にはやや混乱が認められ、後世に一部配置が変更された可能性が強い。年号銘のあるもので最も古いのは後列南端に位置する大形無縫塔で延宝 2 年（1674）の銘があり、次にその東隣の享保 3 年（1718）が続くが両者が第何世に当たるかは不明である。三番目に前列南端の十二世の墓碑に元文 3 年（1738）が認められ、当墓碑群は南側から列をなしながら順次営まれたと推定される。

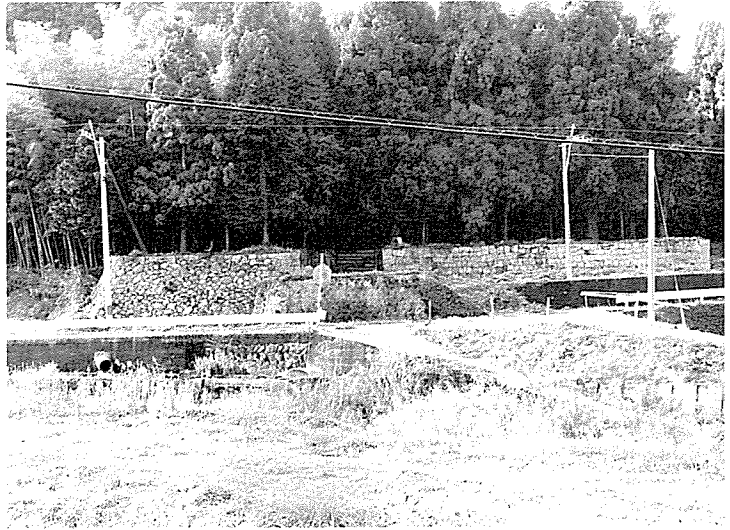


浄土寺住職墓地



第 4 図 浄土寺住職墓地実測図 (1 / 100)

淨土寺全景



同山門跡

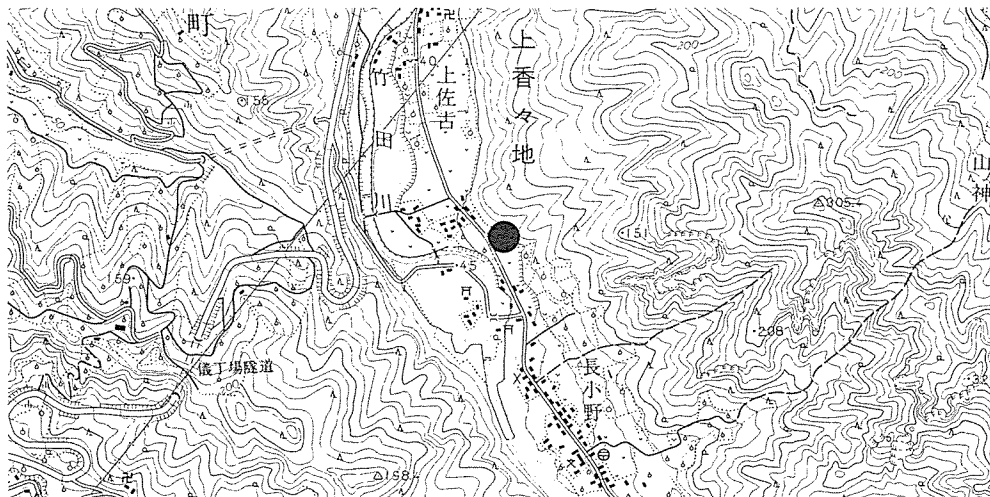


同石碑



2 願成寺

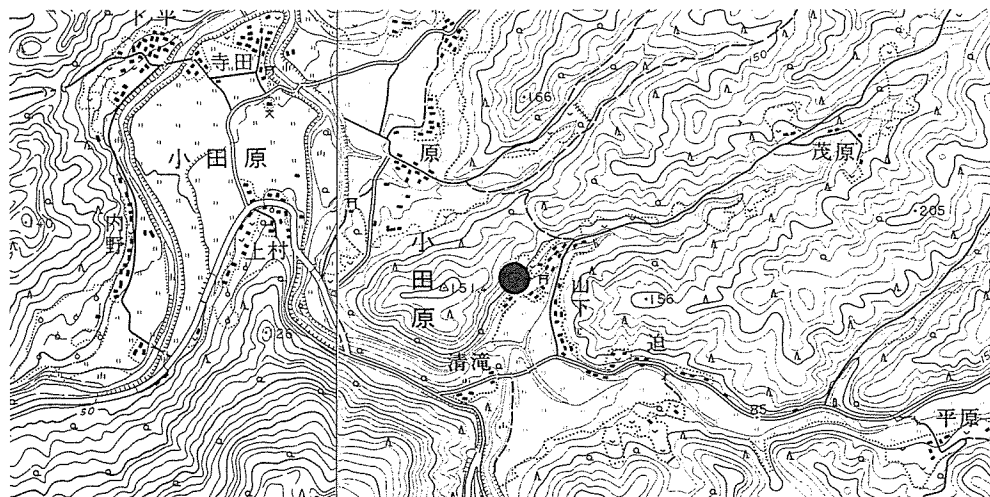
建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文書』（永弘文書）に夷岩屋の末寺としてその名が見えるが、その位置については従来から不明であった。当館が実施した豊後国香々地荘の調査においては、大字上香々地字柿ノ木の柿ノ木五輪塔群の周辺がその推定地として有力視されている。今回の調査でも寺院遺構等の新たな手掛りは確認されなかった。柿ノ木五輪塔群には室町～戦国期の五輪塔が29基ほど存在し、この周辺に寺があった可能性は高いものと思われる。



第5図 願成寺位置図

3 清滝寺

麓谷の入り口にあたる豊後高田市大字路字山ノ下の山裾に位置し、建武4年の『注文書』に本山末寺として寺域と合わせ記されている。江戸時代の『豊後国六郷山巡礼手引』には「五十三番 横嶺村 清滝岩屋（無住）、五十四番 同村 石倉山清滝寺」とある。共に本尊観世音菩薩と記載されているが、現在のお堂内部には所謂焼け仏が残るのみである。お堂の周辺は数段の石垣が地形に沿って組まれているものの、住職墓碑や石造品等はほぼ皆無の状態であり江戸時代後期には無住化したものと思われる。



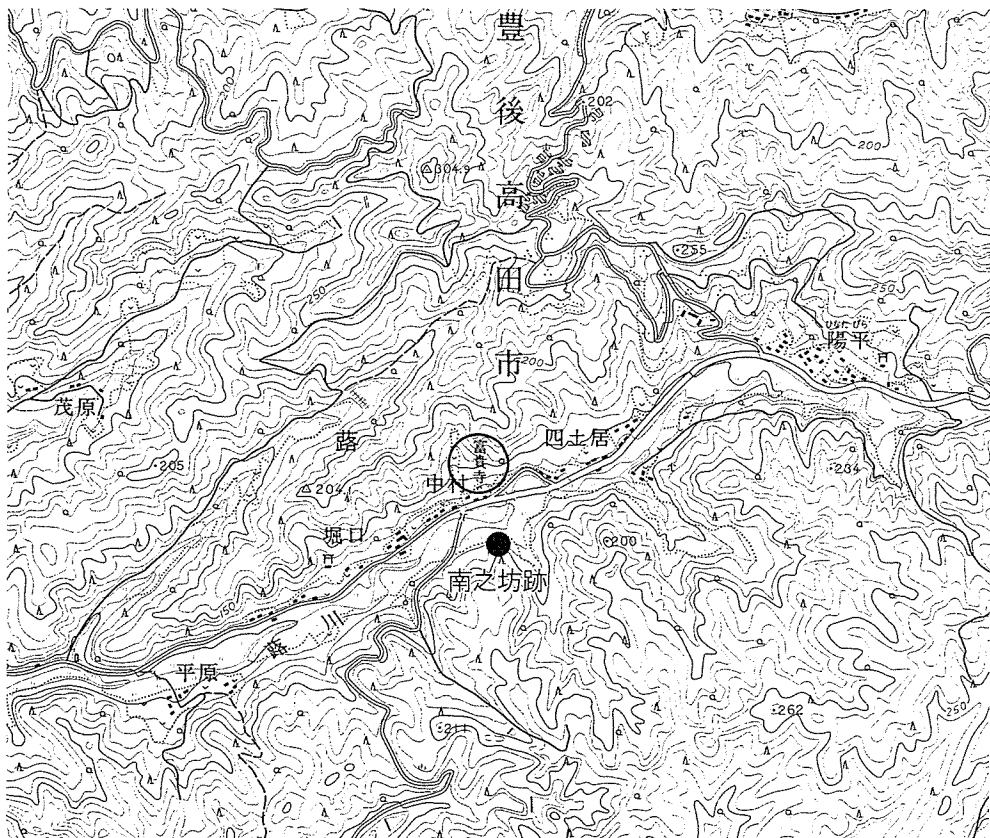
第6図 清滝寺位置図

4 富貴寺

六郷山寺院の代表の一つに挙げられる富貴寺は豊後高田市大字路にあり、貞応2年(1223)の『宇佐公仲寄進状案』に「路浦阿弥陀寺」として見えるのを初源とする。建武4年の『注文案』には高山寺の末寺として記載され、文和2年(1353)には調幸実が阿弥陀堂を修造したことが旧大堂棟木に残る。そして、盛時には講堂のほか院主坊、大門坊、妙蔵坊、南之坊、谷之坊、中之坊、東之坊や末寺の清音寺など多数の堂舎や石造品があったされる。その後、江戸時代の寛延4年(1751)に富貴寺が提出した『寺社指出帳』によれば、これらの堂舎のなかで清音寺や南之坊を除く他の坊が百姓屋敷や田畑と化しており、現在とほぼ同じ景観を示すようである。

院主坊は現在の本堂・庫裡にあたり、妙蔵坊と大門坊はこの東西に、清音寺跡は大門坊の西側に各々比定されている。また、南之坊は路川を隔てた対岸の丘陵裾部に、谷之坊はその東側に比定されているが、東之坊については谷之坊のさらに東側に推定されている。今回の調査は富貴寺とその周辺の坊跡などに残る石塔類の実測と拓本の採取を中心に行った。

南之坊跡の平坦地には地藏像が、山裾には五輪塔浮彫碑・無縫塔・一字一石塔・墓碑・梵字板碑などが残る。無縫塔の表には宝暦十一年(1761) 天台沙門智観大徳覚位 五月廿八日、左側面に伊豫国松山住 の銘がある。一字一石塔の右側面には正徳元年(1711)に南坊賢清が建立した旨の銘文が刻まれている。墓碑には「享保十六年(1731) 當院中興権大僧都亮清法印大和尚位 生年七十



第7図 富貴寺・南之坊跡位置図

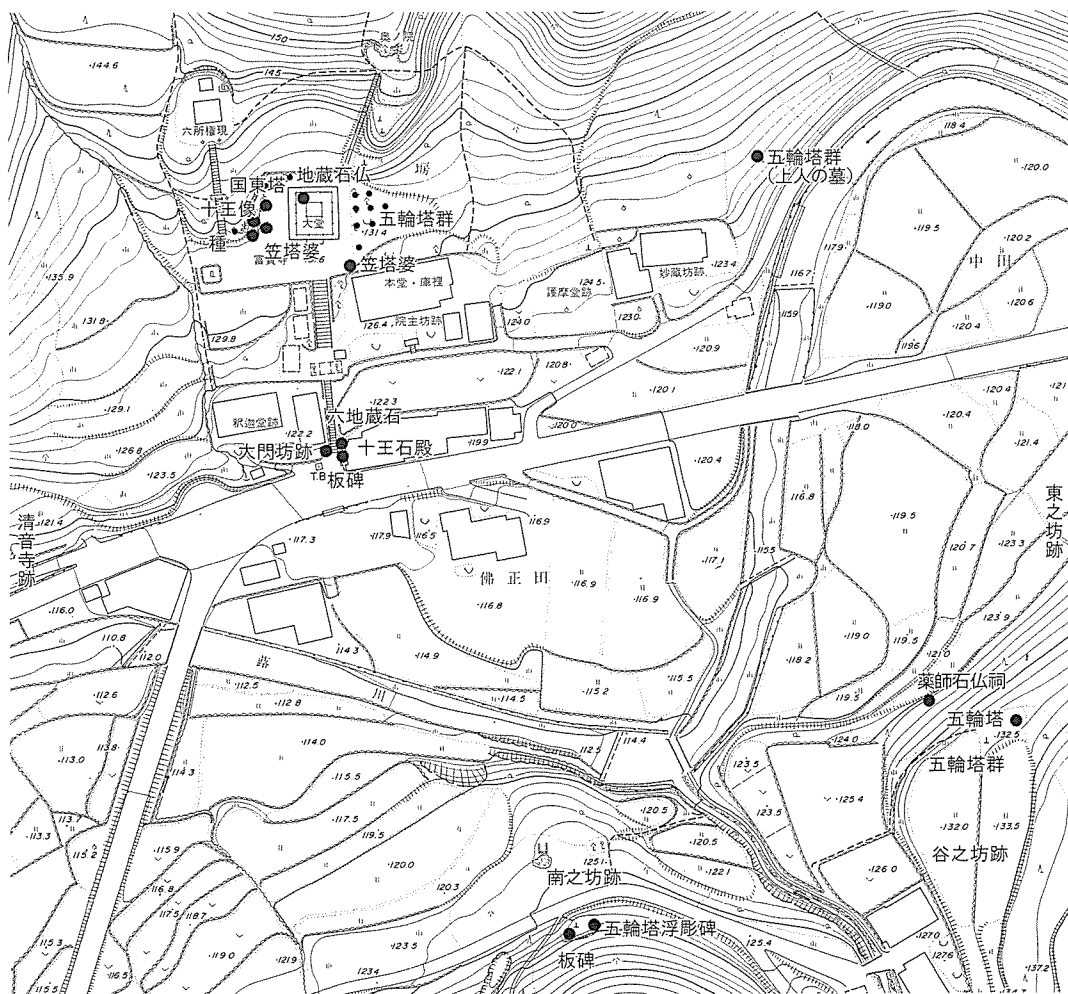
四」と刻まれ、18世紀後半頃までの南之坊の健在を物語る。

第9図に示した五輪塔浮彫碑は高さ約91cm、幅71.5～61cm、厚さ8cmを測り、五輪塔部分を厚さ約1cmほど陽刻し、地輪から上の各部分に梵字を印刻する。銘は無いが類似するものとしては安養寺と大応寺浮彫の五輪塔碑があげられる。これには永録10年(1567)・天正15年(1587)の銘があり、本例の造立もこれらと時期を同じくするものと思われる。

板碑は高さ97.5cm、幅45cm、碑身部厚さ23cmを測り、キリク(弥陀)の種子を刻む。全体にやや小ぶりで額部の面取りは見られないことなどから室町時代後期の所産か。

第10図は富貴寺の南西約350mの河岸段丘上に位置する其ノ田板碑である。建武4年(1334)の銘があり平成9・10年度に火山砂防事業に伴う発掘調査が行われ、2基の板碑に近接して2つの石組墓が検出された。これらから、碑文にある時宗系人物(沙弥道安・沙弥明道)の追善供養のため板碑が建てられたものと報告されている。

第11図は西田平地蔵堂磨崖仏の西側にある巨石に刻まれた磨崖梵字である。幅約4.15m、高さ約2.8mの自然石の平坦面に約70×50cmの範囲に及ぶ梵字(キリク)を刻むもので、其ノ田の板碑



第8図 富貴寺と南之坊跡

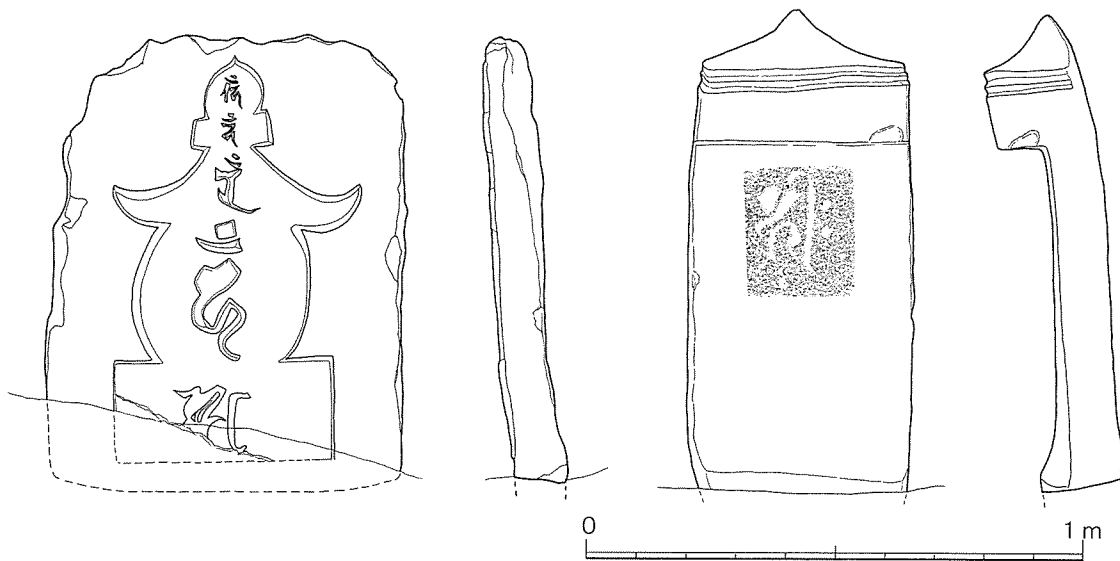
と同様富貴寺周辺の時宗及び地藏講集
 団に関わるものと推定される。



富貴寺南之坊墓地



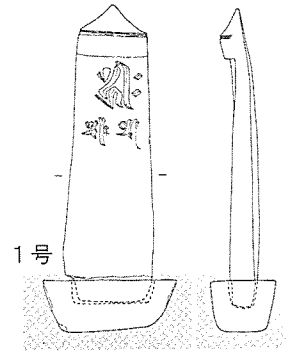
同



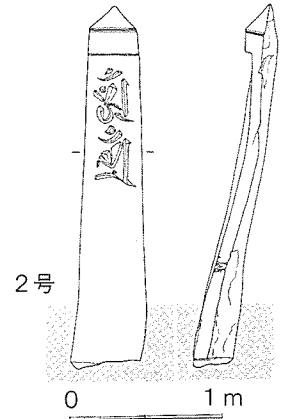
第9図 富貴寺南坊五輪浮彫碑・板碑実測図



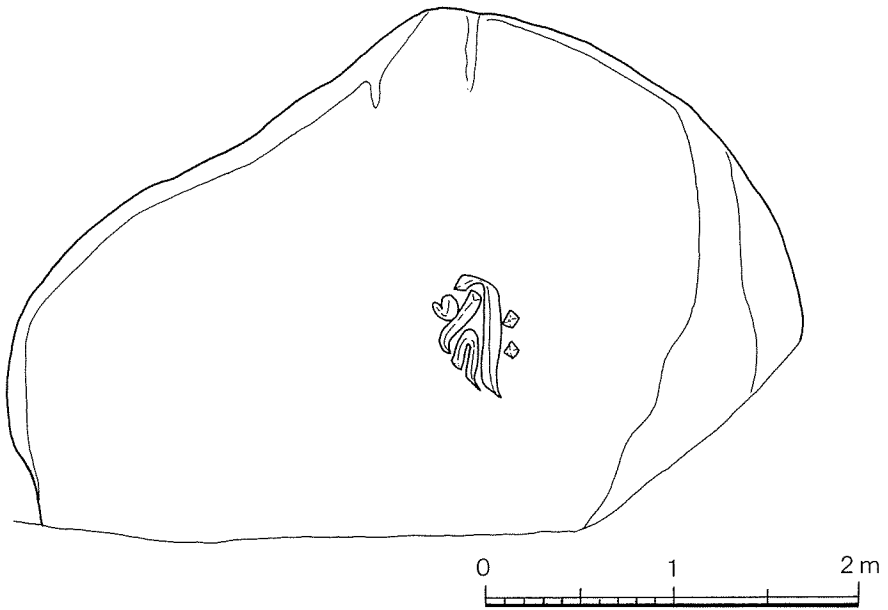
南之坊板碑



富貴寺
十王像



第10图 其ノ田板碑実測図



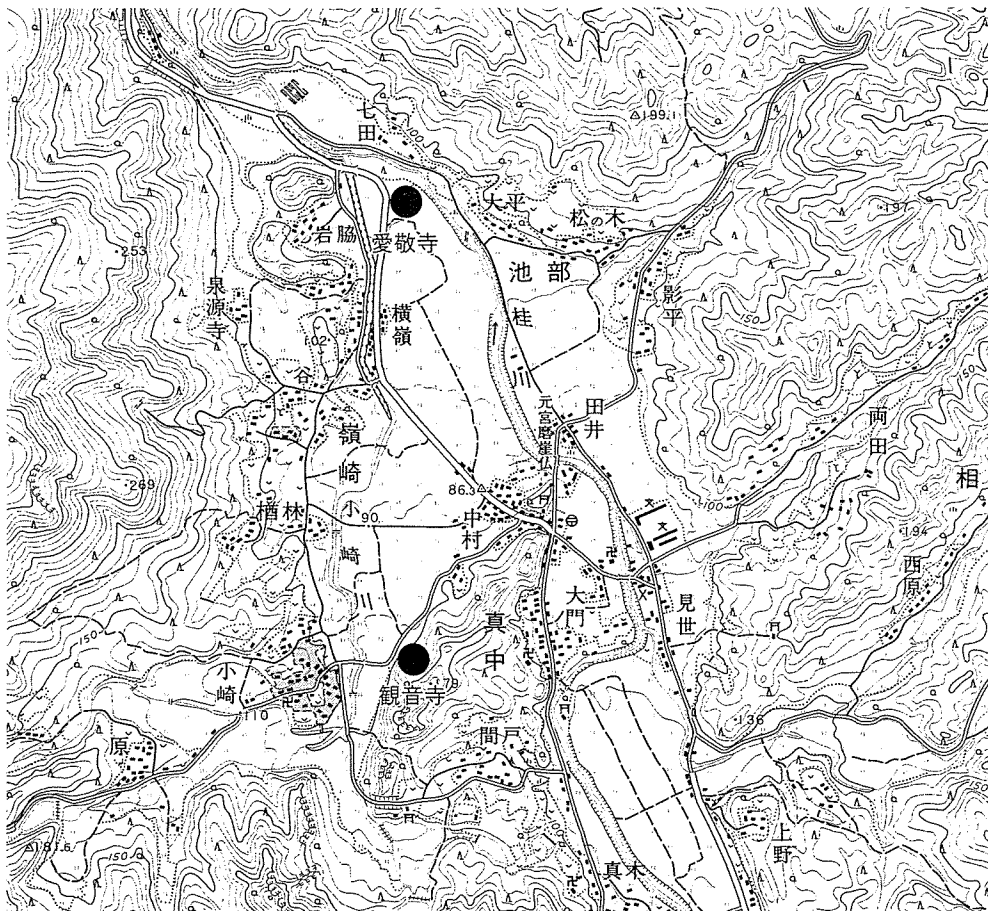
第11图 西田平地蔵堂西磨崖梵字

5 愛敬寺

建武4年の『注文案』に「一 …鳥目岩屋 馬城寺末寺也、…」とあり、『豊後国六郷山巡礼手引』には「五十式番 同庄之内横峯村同領 無住 一 鳥目岩屋 本尊観世音菩薩」と記載されている。早くから無住となったためか、推定地である豊後高田市大字横嶺字鳥免の周辺に寺跡の存在を示す石造品や墓碑等は全く見られない。また、圃場整備事業が既に行われており今回の調査においても新たな知見は得られなかった。

6 観音寺

観音寺跡は豊後高田市大字真中字小崎の山腹に比定されている。かつて当館が刊行した調査報告書である『豊後国田染荘の調査Ⅰ』によれば、比定地には三間四面の堂跡と天正年間の墓碑・宝塔・五輪塔等が確認され田染氏の氏寺的存在と推定されている。建武4年の『注文案』には馬城寺の末寺の鳥目岩屋として記されており、『豊後国六郷山巡礼手引』では五十式番に無住の鳥目岩屋として出てくる。その後、江戸時代中頃に再興されたとの記録が『田染村志』にあり、寺跡南側の墓地には享保から天保年間の墓碑が認められる。今回の調査では以上の遺構や石造品を再確認したに留まるが、現地は荒廃が進みこれらの保護対策が急務である。

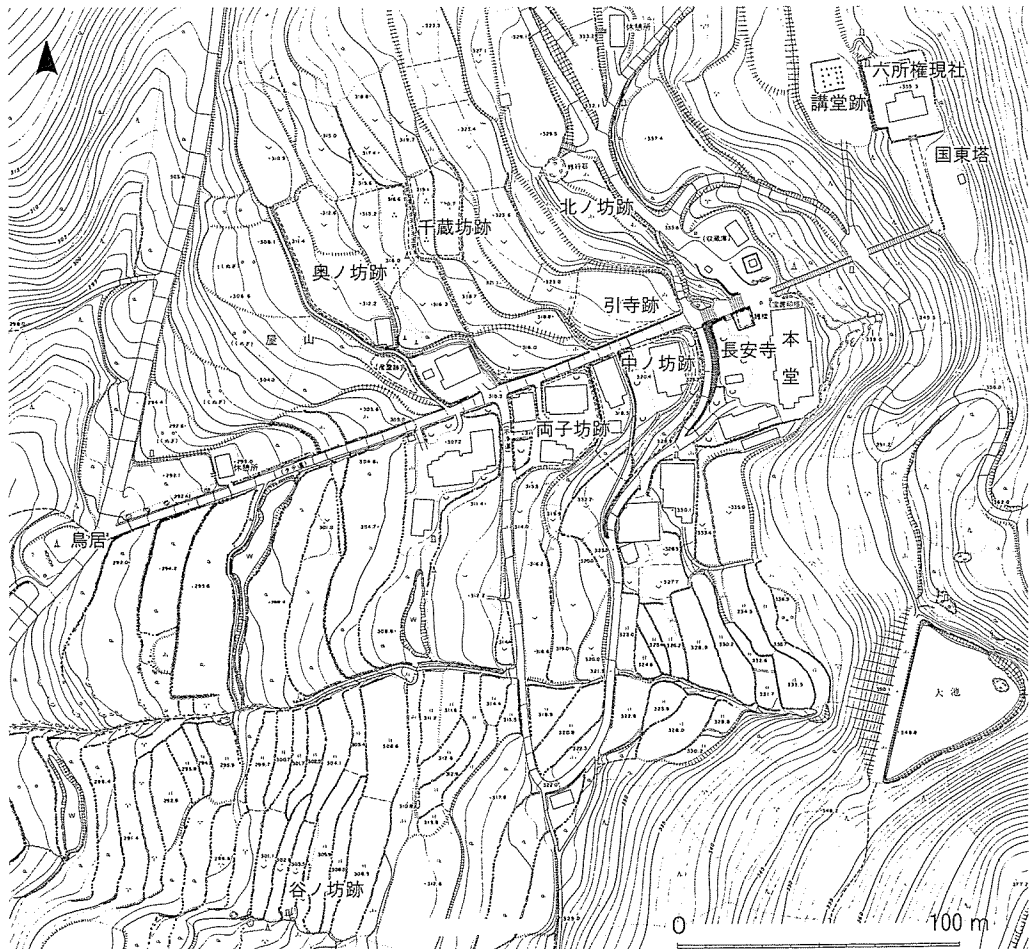


第12図 愛敬寺・観音寺の位置

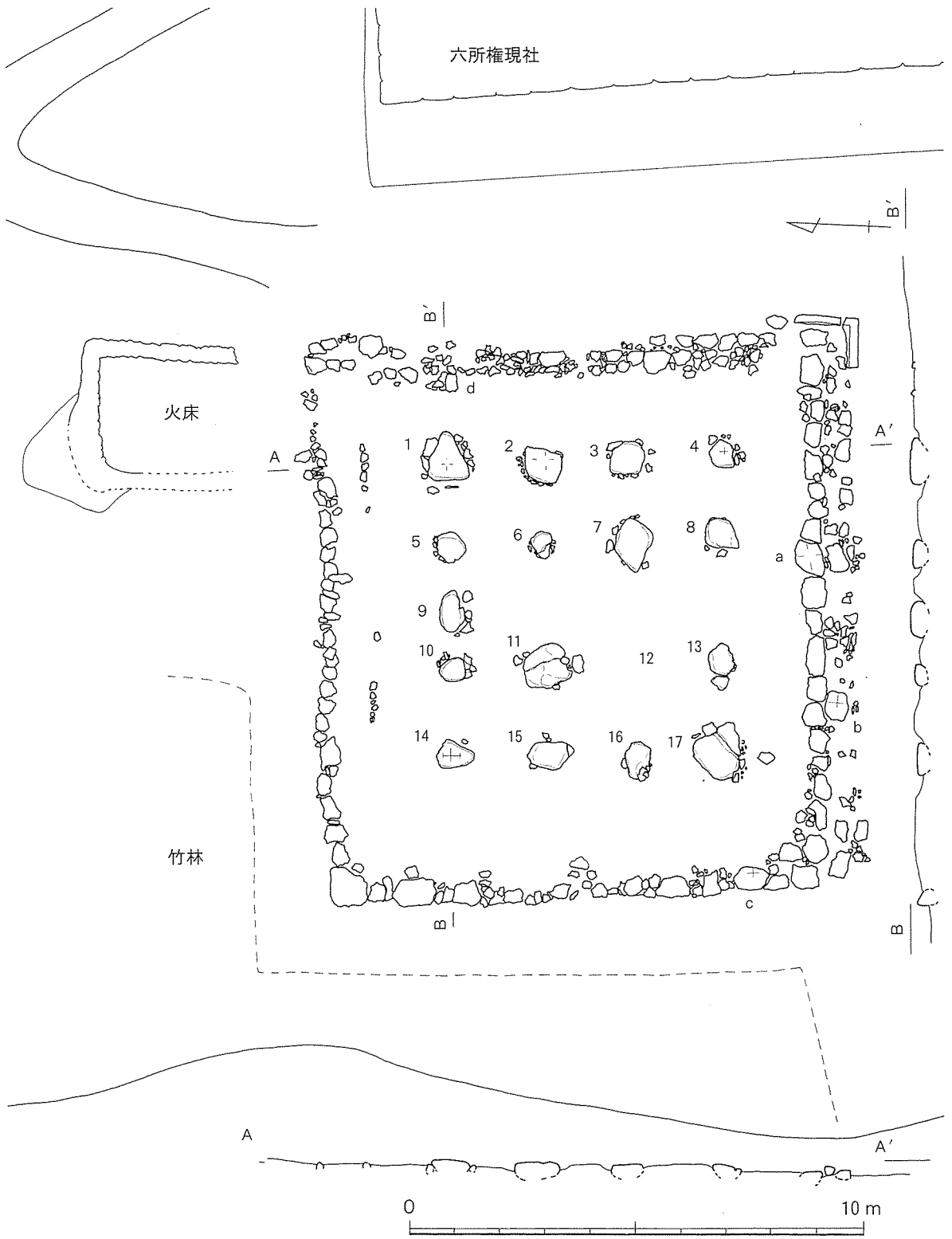
宰管内志)には「…講堂は五間四面で本尊は薬師脇侍は観世音なり…」とあるが、この講堂の規模には底部分が含まれたものと理解される。

講堂跡は六所権現社下の標高約 350 m の平坦に造成された場所にあり、従来から三間四方の身舎部分の礎石と基壇の縁石などが露出していたが最近では雑木や竹が繁茂していた。調査は伐開から開始し、その後に礎石や縁石の検出作業を行った。基壇は東西約 12.3 m、南北 11.2 m の東西に長い長方形をなし、その中心からやや南東寄りに三間四方の堂宇の礎石が配置されている。礎石は一石を除き現存し下部に根締石も検出されたが、庇に伴う礎石の存在は確認されなかった。

東北隅を 1 とし南西隅の 17 までの番号 (12 は抜取られ不明) を付した身舎の礎石の多くは、江戸時代末期頃の火災によると思われる石表面の剝離やひび割れが認められた (第 15 図)。礎石は大きいもので 1.4×1.2 m、小形で 0.7×0.6 m 余り。その中の 1・4・14 の上面には十字状の線刻が施されると共に、柱を設置するため敲打による平坦面の作出が観察された。線刻は 2・13 にも部分的に残り、13・16 には敲打痕が一部認められた。これらから、最終期の講堂身舎の規模は桁行 6.5 m (約 215 尺)、梁行 6.1 m (約 200 尺) となり、桁行中央間が 2.5 m (8.25 尺)、他の柱間は 2 m (6.6 尺) であるこ



第 14 図 長安寺境内図



第15図 講堂跡実測図 (1 / 200)

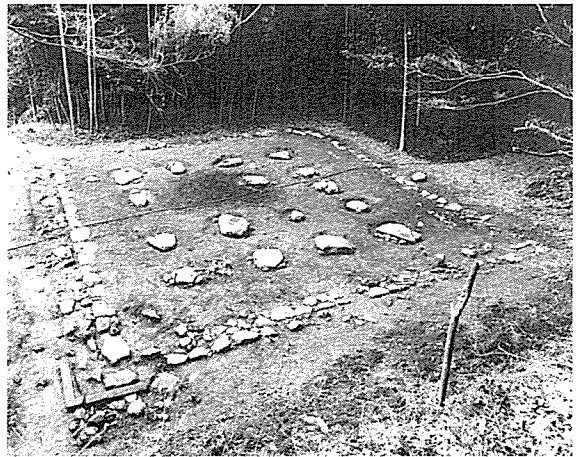
とが判明した。この身舎規模は両子寺 (5.91 × 5.91 m) ・智恩寺 (5.92 × 5.88 m) ・岩戸寺 (5.89 × 5.85 m) ・千燈寺 (7.27 × 6.06 m) ・天念寺 (5.94 × 5.94 m) など他の六郷山寺院の講堂の規模と大差はない。

基壇の縁石は南側と東側が一部二重となり、北側の礎石との間にも縁石列が部分的に認められ数回の建替えを窺わせる。また、a～dの縁石には身舎の礎石と同様の十字状線刻が残り、これらの石はやや小形であることから庇の礎石として使用されたものを転用した可能性が強い。従って、これ以前は一間の庇を巡らした五間四方の建物であったと推定され、18世紀後半の江戸時代の記録と矛盾しないこととなる。前に述べた諸寺院の講堂も同様の構成を示しその規模の類似性から、「鬼会」を執り行う上でこの規模と構造が良く適したものであったことを物語る。

また、基壇の北東約2mの所に約3.3 × 3.3mの石組遺構が検出され、これは鬼会の松明に火を付ける「火床」と判明した。同様の位置に「火床」を配置するのは天念寺や千燈寺にも見られる。表土から採集された土師質土器の小皿・坏 (第16図) の多くは江戸時代の所産と考えられるが、15世紀から16世紀に比定されるものも若干含まれる。

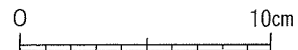
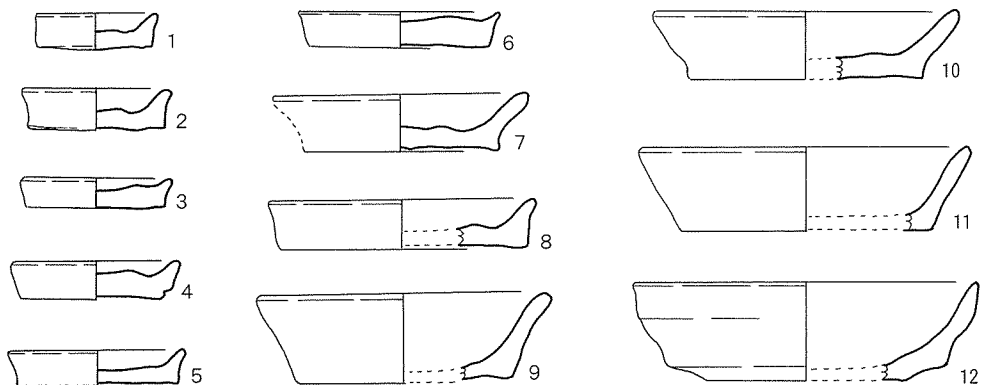


火床



講堂跡と六所権現社

講堂跡全景



第16図 講堂跡出土小皿(1～6)、坏(7～12)

屋山寺(長安寺)関係文献抜粋

年号	出典	記載事項	備考
仁安3年 (1168)	仁安三年六郷二十八山本寺目録	(分) 正宗文中山十箇寺 …金剛山長安寺…	太宰管内志 (後世の作)
安貞2年 (1228)	六郷山諸勤行並諸堂役諸祭等目録	本山分惣山 一 屋山寺 本尊千手観音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤行正月會自正月一日至同三日三ヶ夜勤也、修二月會自二月一日同至三日修舍利會、有舞樂二月十五日勤也、百座仁王經會正月八日勤、大念佛自九月十三日同至十五日三ヶ夜勤也、法華不斷經十月十八日同至廿日三ヶ夜勤也、曼荼羅供季別勤八座問答講、天台大師供十一月廿四日勤也、佛名經十二月廿三夜勤也、月並往生講勤之毎月十五日、観音講毎月十八日、月次勤始後入堂讀誦經典、六所権現於御賽前、每季一日轉讀大般若會、請僧季別廿人、每季百座仁王會、一夏九旬不斷供花、二季御祭五節供等、法華問答講一座五問毎月廿八日勤之、轉讀大般若經一部請僧廿人、並法華八講請僧八人、小立義十問、賢者注記合十二人毎季以十二月廿三日一日一夜勤也、今始御祈禱長日轉讀大般若一帙、仁王講一座、観音經三卷、件勤等満山現德器量撰之、	長安寺文書
弘安7年 (1284)	六郷山異国降伏祈禱件数目録寫	中山分 屋山 七箇日不動行法毎月、轉讀大般若經一部每季、壽命經一千卷講讀仁王經一百座、奉讀誦観音經一千卷、奉講法華八講問答講、一日一夜御神樂二季	長安寺文書
嘉元2年 (1304)	六郷屋山例講谷役配分注文	六郷屋山例講谷役配分注文書 五月八屋山	長安寺文書
建武4年 (1337)	六郷山本中末寺次第並四至等注文書	中山 一 屋山 限東田原路 限西明神前道向神護石 限南鳴石 限北折花 委院主所持證文仁明白也	永弘文書
天明年間 (1781~1789)	天明年中六郷山寺院名簿	加禮川村金剛山長安寺ハ山門末島原領本堂講堂寄附四石許境内堅二百五十七間横百五十五間とあり長安寺に寺百姓といふ物四五軒ありて寺の左右に住めり長安寺より三町許南に吉弘嘉兵衛の城跡あり故に山の絶頂を城ノ辻といふなどあり金剛山長安寺は國東郡加礼川村ノ内彌山の半嶺八面山とも云なりにあり天台宗にして六郷山ノ学頭とす寺は西向なり庫裏本堂共に違つゞけて入五間横十三間許あり本尊は不動尊なり西ノ方高田ノ海を望む南方すべ(て)見はらしのよき處なり半町上に講堂あり五間四面南向にして本尊は薬師傍佛は観世音なり太郎天ノ社此上に在り寺地ノ石垣高一丈四五尺長二十間許もあるべし南に矢山ノ城跡あり寺より西ノ麓に八町許南ノ麓に十八町許又北方に十余町下りて天念寺に至る	太宰管内志

第三章 調査の成果と課題

1 近世六郷山に関する一史料

1 「豊後国六郷山巡礼手引」について

ここで紹介しようとする「豊後国六郷山巡礼手引」（以下、「手引」と略する）は、六郷山に関わる札所を書き上げた記録である。六郷山とは国東半島域に点在した天台宗寺院の総称であるが、16世紀以前には、本史料にあるような札所は現在の所見ことができず、こうした札所の設定は近世になってからのことといえる。つまり、このような札所を書き上げた「手引」は、近世六郷山の歴史を考える上で基本となる記録といえよう。既に、本史料は1957年に松岡実氏によって紹介されている（『大分県修験史料』豊日史学叢書1）が、それから40年以上が経過し、掲載書自体が容易に入手できないこと、また翻刻されたものにも残念ながら誤読や脱漏等があること、そして上述したように、本史料は近世六郷山の検討にあたって、注目される史料であることから、ここに改めて紹介することとした。

ただし、松岡氏が紹介された香々地町隈井涕吉氏蔵の「手引」は、現在所在不明となっているが、『大分県史料』編纂時に撮影が行われており、フィルムがいまに残されている。フィルム番号は276。当時、香々地町上香々地に所在した余瀬文書の後に撮影されており、「手引」も香々地町での史料採訪時に撮影されたものと見られる。今回は、この大分県史料編纂時のフィルムの紙焼き本をもとに翻刻を行った。

2 「豊後国六郷山巡礼手引」の成立年代

ところで、隈井氏のもとに蔵されたという「手引」の記載を見ると、例えば、19番青龍山祥光寺は、前の18番の注記で「禪光寺」と記載されていること、144番野田山平等寺の本尊を「釈迦文仏」と記すように文意を直接にとりがたい記載があること、さらには後でも触れるが153番文殊仙寺の注記に「是々大恩寺迄壺里」と記しているにもかかわらず、次は155番喜福院の記載となっており、大恩寺の記載が欠落していること等は、書写の過程での誤写あるいは脱漏を示すものといえ、「手引」が写本であることを伝えているだろう。ちなみに、「手引」は後で示したように、「義統公六郷破却」という記載で終了しており、さらに記述があるのかどうかは現在の所不詳というほかないし、ここから直接に本書の製作年代等を知ることはいえない。

しかし、写本たる本書のもとになった記録（以下、「原手引」と呼ぶ）の成立については、本文中にそれを窺わせる手がかりを見つけることができる。31番聞山岩屋の項に付された「三十一番 同庄ノ内菊山村 御公領也」という注記がそれである。「手引」における札所の所在地に関わる注記は、上に引用した通り、基本的に当該地が中世段階に属した荘園名、村名、近世段階に属した藩名を書き上げている。聞山岩屋の場合、注記にいう「同庄」とは宇佐宮領田染荘を示しているが、ここで注目すべきは最後の「御公領也」という部分である。ちなみに、聞山岩屋の前後の札所は肥前島原藩領であり、32番釈迦堂は「同庄ノ内馬城村 嶋原領也」と注記されている。国東半島域における肥前島原藩領は

寛文9年(1669)に成立しており、「原手引」の成立は寛文9年以後であることがまずわかる。

そして、「御公領」であるが、菊山村は中世には田染荘(現在の豊後高田市田染地区)に属したが、慶長5年(1600)中津藩領、寛永9年(1632)龍王藩、正保2年(1645)幕府領杵築藩預りとなり、周囲の村々が寛文9年に島原藩領となる中で、幕府領のまま元禄2年(1689)からは幕府直轄領、そして正徳2年(1712)からは日向延岡藩領に属した。これをふまえると、上にいう「御公領」は幕府領を示すものであり、「原手引」は正徳2年の延岡藩領への編入前後が作成年代の下限となる。さらに言えば、「御公領」を幕府領でも預り地ではなく、直轄領と解すれば「原手引」の成立は元禄2年以後となる。

この点に関して、留意されるべき史料として「国東旧新略記」(以下、「略記」とする)がある。「略記」は、土谷家文書に残された記録であり、このうち「国東郡寺」という部分には、のちに日向延岡藩領となる西国東郡香々地町・真玉町の寺院が書き上げられている。この部分は、寺院名から元禄3年(1690)～11年(1698)に作成された記録の書写と考えられ、それによると靈仙寺はもともと根本院と称され、「巳春ノ吉婆蘇山靈仙寺成、寺社奉行土肥理左衛門様ニ御断申上」と注されている。ここにいう「巳春」とは、元号も記されていないこともふまえると、元禄3年～11年に求められる「略記」の成立時期に最も近い巳年、すなわち元禄2年を示す可能性が高い。すると、135番に靈仙寺と記す「原手引」は同年以後の記述と知ることができる。

論述が煩瑣になったが、以上述べてきたことをまとめておくと、「原手引」の成立は、元禄2年以後正徳2年頃と推察される。

3 「豊後国六郷山巡礼手引」と「豊前豊後六郷山百八拾三ヶ所靈場記」

さて、次に「手引」の構成について見ることにしよう。

「手引」を見ると、札所には番号が付され、所在地や本尊名、札所に関する注記、札所間の距離等が記されている。かかる記載から、近世においては従前の六郷山の諸寺院とともに、小堂や神社もあわせて国東半島域に「四国八十八ヶ所」のような札所が設定されたことがわかる。なお、「手引」では、札所に付された番号は、185番横城山東光寺で終わっているが、全体の構成については153番文殊仙寺の次が155番喜福院と記載され、154番が欠番となっていること、57番が岩脇寺の岩屋と薬師堂の2ヶ所に重複して付けられていることが留意される。前者については、前にも触れたが本文の153番文殊仙寺の項には「是ノ大恩寺迄壱里」とあり、154番は大恩寺であることが窺える。一方、後者については番号が重複しており、これを2つとして数えると「手引」に書き上げられた靈場は、186ヶ所ということになる。

しかし、「手引」の奥書には「都合百八拾三ヶ所」と記されている。この差異はどこに求められるのであろうか。まず1つには、71番八幡宮(永松村)と72番薬師岩屋(上沓懸村)が再び73番と74番として書き上げられていること、そしていま1つには朝日岩屋(間戸村)が34番と36番と重複して記されていることが注目される。つまり、これら3つの札所が各々2度記されていることから、この重複分を差し引いた時、都合183ヶ所になる。ただ、前で述べた57番の重複については、1番後山や34番鞍懸山のように、寺院が寺院の機能を果たさず、これに付属する岩屋がある時、どちらかに番号

が与えられている場合があること、そして岩脇寺がこれにあたり、56番に岩脇寺が別に数え上げられていることを併せ見ると、岩脇寺岩屋は無番となり、57番は薬師堂のみと見ることも可能である。すると、無番は札所数に入らないことから、札所数は「手引」の記載通り合計185ヶ所となる。この場合、先の八幡宮・薬師岩屋・朝日岩屋の重複分をひくと、実際の札所は182ヶ所となり、「都合百八拾三ヶ所」の記載と整合しない。このように札所構成をめぐる、複数の解釈が成立しうる所に、「手引」段階における札所の整備の不安定さともいべき状況を看取することができよう。

ところで、このような「手引」に類似する史料が他にもある。「豊前豊後六郷山百八拾三ヶ所霊場記」（以下、「霊場記」とよぶ）である。これは『六郷満山関係文化財総合調査概要（二）』（大分県文化財調査報告書第38輯 1977年、以下『調査概要（二）』とする）に全文が翻刻掲載されており、奥書から宝暦5年（1755）に記されたものを大正元年（1912）に霊仙寺（香々地町）住職青山映道が書写し、さらにそれを昭和23年（1948）千燈寺（国見町）今熊豪正氏が書写したものであることがわかる。ただし、原本は現在の所発見されていない。この「霊場記」は、地名も明治以後のものが記され、富貴寺の項には「壁画並ニ阿弥陀如来ハ国宝ナリ」とあるように、本文中の注記も国宝のように近代以後の概念が使用されている。『調査概要（二）』で「霊場記」に言及された小玉洋美氏も述べられているように、現在見ることのできる「霊場記」は書写の段階で改変が加えられており、宝暦段階の「霊場記」がいかなる体裁のものかはなお詳らかでない。

それでは、「手引」と「霊場記」とはいかなる関係にあるのだろうか。

まず、「手引」と「霊場記」に記された札所を併せ見た時、大きな差異は「霊場記」でいう38番本宮（田染元宮）が「手引」には見られず、代わりに岩脇寺岩屋が書き上げられている。前でも触れたように、「手引」では岩脇寺と同寺岩屋の2つが記されているが、「霊場記」では岩脇寺岩屋は記されず、本宮が新たに書き加えられたのである。このことは、「霊場記」では岩脇寺に関わる2つの札所を1つとし、新たに本宮を加えるという札所の整備がなされたことを示しているのではなからうか。ただ、田染地区には3つの八幡宮があり、二宮と三宮は「手引」と「霊場記」両方にある。「手引」において、何故に元宮が数えられていないかは、現在の所不詳である。

また、「手引」と「霊場記」とでは、札所に関わる注記について、大きな違いがある。

「霊場記」に比べて「手引」のそれは具体的であり、なかには興味深い情報がある。例えば、44番と45番の間に記された無番の鞍懸山（奥畑村）は「当寺ハむかしほり崩し城に仕候由」とある。後者の鞍懸山の記述に関しては、その真偽は定かでないにしても、寺の故地がいわゆる鞍懸城とする伝承が所在したことを伝えている。この他、札所間の行程についても、44番轆轤岩屋から鞍懸山までは「沓里ほと山越、むつかし案内備ひてよし」と記され、121番小両子岩屋から122番龍門岩屋までは「五丁ほと、竹藪之内」と行路の状況も書き留められている。

つまり、「手引」の注記にある札所や札所間の道の様子などについての記述は具体的であり、実際に現地を歩くことで得た情報に基づくものといえよう。まさに「六郷山巡礼」の手引書としての記述となっているのである。一方で、「霊場記」は各札所についての情報は少ないが、「手引」同様に札所間の距離は記されている。

これらのことをふまえると、「霊場記」は既存の札所を改めて整備する動きの中で作成され、記述自

体は先行する「手引」をもとになされたと見られる。そして、これら2つの記録は、近世六郷山における札所の整備が、まず「原手引」が成立した段階では183ヶ所とされる札所にも重複等が見られるように確立されたものではなく、「霊場記」成立の18世紀半ばに至って、初めて183ヶ所の札所が完全に整備されたことを物語っている。

4 「入峯」と「峯入」－「豊後国六郷山巡礼手引」と近世六郷山－

それでは、元禄2年～正徳2年頃という期間に作成されたと見られる「原手引」そしてここに記載された札所の設定は、いかなる歴史的背景の下でなされたのであろうか。

この課題を検討する上で、まず今年度の調査対象寺院の1つである富貴寺大堂内陣の東南柱に残された墨書に注目することにしたい。そこには次のような記載を見ることができる。

元禄十四辛巳稔

□□□山仁聞大菩薩古□

二月十三日

現況ではこれ以上の判読は難しいし、現在も見られる峯入とこの元禄段階との間には相違点もあるだろうが、記載の在り方から、これはいわゆる峯入の際の墨書銘と見られる。元禄以後の近世において、峯入は宝永3年(1706)、寛延3年(1750)、宝暦9年(1759)、安永8年(1779)、寛政11年(1799)、文化14年(1817)、天保8年(1837)、嘉永6年(1853)に実施されたことが、諸記録や柱の墨書銘から知ることができる。

ところで、『八幡宇佐宮御託宣集』(以下、『託宣集』という)には「六郷山者昔八幡大菩薩、為人聞菩薩、久修練行之峯也」とあり、こうした仁聞の「巡礼次第」を知るために津波戸山で修行した能行は、斉衡2年(855)に六郷山での修行には2つの経路があることを感得したとされる(『託宣集』又小椋山社之部上)。さらに、安貞2年(1232)の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録」(以下、「安貞の目録」とよぶ。『豊後国荘園公領史料集成』1(別府大学)等に翻刻されている)には「初学行者、学人聞菩薩旧行、巡礼一百余所厳掘」とある。つまり、これら中世の諸記録からは、六郷山が山岳修行の地という本源的性格を有し、少なくとも13世紀前半には、山岳修行の1つとして八幡神の応化たる仁聞菩薩の「旧行」にちなみ、「厳掘」を巡ることが六郷山の僧侶が僧侶という身分を得ることの必須条件とされていたことが窺える。かかる巡礼は、回峯行といわれる僧侶個人による修行の一種といえる。一方、応暦寺(真玉町)に残された「修正鬼会経文第六卷」には、「天正ノ比ハ住持順慶法師峯七拾五度、寛文ノ比ハ住持澄慶法師入峯五度」と記されているという。この記載は並列的に記されていること、さらに特に順慶による75度という回数から、順慶法師あるいは澄慶法師が行った「峯七拾五度」や「入峯五度」は、ともに上にいうところの僧侶個人による回峯行を示すものといえよう。ただ、その詳細は不明である。

すると、現在いうところの峯入は僧侶集団によって実施されるもので、確かに回峯行という点では応暦寺の記録等にいう「入峯」と共通するものの、修行主体という点では異なるものといえる。柱に墨書を残し、『追遠拾遺』や『田染水鏡』などの近世の支配層や村の庄屋の記録にも書き留められたことは、いわゆる峯入が僧侶個人の修行というだけでなく、六郷山の僧侶たちによる1個の宗教行事と

して近世社会において位置付けられていたことを伝えている。

それゆえ、「安貞の目録」や応曆寺等の記録に見られる回峯行としての修行（以下、「入峯」と呼ぶ）と僧侶集団による修行さらには行事という性格も有する現行の「峯入」に連なるもの（以下、「峯入」と呼ぶ）とを、峰を廻るという点をもって同一のものとして捉えるべきではないだろう。換言すれば、中世においては「安貞の目録」にあるように、入峯の実施を知ることはできるものの、具体的な順路等は不明であり。半島域を巡る峯入は、直接には近世段階に創出されたものと見なされるのである。また、昭和34年、嘉永6年以来106年ぶりに峯入が復興するまでには、巡礼先や行程の現地踏査がなされたという。こうした状況をふまえるならば、入峯とは異なり、僧侶集団によって実施されたと見られる元禄の峯入にあたっては、赴く先の選定、行程の踏査がなされたものと推察される。

以上の点をふまえた時、「原手引」に見られる札所の設定は、峯入の実施と関連させて理解することができ、「原手引」は元禄14年頃の成立と見なすこともできよう。

しかしながら、183ヶ所の札所は奥書にあるように62ヶ所が「国崩時入来ル分」で残りが「空心改加ル分」とある。この空心については、現在の所いかなる人物であるのか不詳であるが、少なくとも17世紀段階から、仁聞あるいは従前の六郷山の歴史に関わるものという基準によって、これら札所が存在したと目されるが、より具体的な選定基準および成立年代を明確にすることはできない。それに現在の所元禄14年の峯入がいかなる経路を辿ったのかも不詳である。確かに、元禄の峯入実施は「原手引」の成立時期に含まれるものの、両者の相関関係は史料上明確ではない。ただ、前述したように峯入の実施と札所の整備とは決して無縁ではなく、「原手引」の成立を元禄14年頃と断定することは難しいにしても、17世紀最末期から18世紀初頭に求めることができるだろう。

一方で、札所の設定は、大嶽順公氏が指摘されたように、札所の整備は「庶民の間に霊場参拝の巡礼行も流行した」という状況をうけてのことと見ることもできる。前では、札所の整備と峯入の実施が無縁ではないことを推察したが、実際の所「原手引」が成立したことの契機はなお十分に解明することができない。ただ、ここで重視しておきたいことは、少なくとも18世紀初頭に札所の設定そして行事という側面を有する峯入が実施されたことである。八幡神の応化たる仁聞の回峯の伝承とともに、在地の堂社を含み込むかたちでの札所の整備は、従前の六郷山においては見られなかったものであり、ここに六郷山という集団の縁起が新たに形成されたことを示しているのではないだろうか。また、峯入も僧侶個人の修行としての回峯行ではなく、僧侶集団による宗教行事という性格を有することで、六郷山の存在をアピールする役割を持つもので、六郷山による「自己宣伝」という本質を有するものと見られるのである。

近世においては、例えば寺院による勧化や出開帳等の「宣伝」が行われ、一方では特に18世紀中頃から霊場譚や霊験譚が盛行するようになる。これらは幕藩体制の下での限定された所領や僅少な檀家に基づく経営のなかで、寺院が自己の霊験や由緒をアピールすることで、種々の困難な経営条件を補うために、あるいは近世社会の人々の中では後世救済や非業意識が退潮し、現世利益が重視されるなかで、寺院もまた「庶民教化」においては現世利益が前面に出されたためであると見られている。すると、上述した六郷山における札所の整備や峯入の実施は、こうした近世寺院の在り方に連なるものといえ、「新たなる六郷山」の創出という歴史的意味を有している。まさに、「原手引」そしてここに

記載された札所の整備は、おそらくは六郷山僧侶たちによる「新たなる六郷山」の創出という動きを明確に示したものと見えるだろう。そして、17世紀最末期から18世紀初頭は、近世六郷山の歴史にとって大きな画期であり、その後近世を通して六郷山では「霊場記」に示された札所のさらなる整備や『仁聞大菩薩本紀』等の縁起の作成が試みられていくのである。

註

- (1) 『豊後国田染荘の調査 I』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986年)。
- (2) 「国東旧新略記」(『豊後国香々地荘の調査 本編』大分県立歴史博物館 1999年)。このうち、「国東郡寺」には現香々地町所在の寺院として、「善照寺」と「川原坊」が記載されている。「西国東郡寺院明細牒」によると、「善照寺」は、元禄3年に寺号免許がなされ、「川原坊」は元禄11年に寺号が許されることから、「善照寺」と「川原坊」という記載のある「国東郡寺」の原本は元禄3年から11年に作成された記録といえる。
- (3) 『峯入りの道』(大分県文化財報告第48輯 大分県教育委員会 1981年)。
- (4) 前掲註(3)。
- (5) 『くにさきの峯入』(六郷満山会 2000年)所収の千燈寺今熊豪正氏の談話。
- (6) 藤井 学「近世仏教の特色」(『近世仏教の思想』日本思想大系 岩波書店 1972年)。

<付記>

翻刻にあたって、本文の表記は、以下の基準によっている。

- 1 字体は基本的に原本に従ったが、異体字・俗字は原則として正字に改めた。
- 2 仮名遣いは、原則として原本のままとしたが、変体仮名については平仮名に直した。
文字の大きさは原本に合わせて適宜変えた。
- 3 合字については、ゞ(より)はそのままとした。
- 4 本文には適宜読点・並列点を付した。
- 5 写真版からの判読のため、判読しがたいものについては□として表現し、字数が推測できる場合はこれに従い、字数が推測できない場合は□□とした。
- 6 体裁は基本的に原本に従ったが、編集の都合により行替については原本通りになっていない所もある。
- 7 本文において、編者の用いた記号のうち、()は誤記・誤脱等に対する編者の案。(ママ)は文意の通じないものとした。

豊後国六郷山巡礼手引

- 壹番 封戸郷ノ内立石村嶋原領也
無住本尊共破壊
- 一 後山金剛照寺 本尊阿弥陀仏
当寺ハ屋しき斗にて
- 同所是ニ札納
- 一 同山岩屋 無住 本尊薬師如来
- 二番 山香郷ノ内松尾村立石領也
- 一 大日岩屋 無住 本尊上同
- 三番 封戸郷ノ内立石村嶋原領也 住持あり禅宗
- 一 観音院 本尊上同
是ノ吉水迄十四丁程あり、坂を越ル、権現堂拜して(ママ)
- 四番 同郷ノ内両戒村右同領也
有住持 禅宗
- 一 吉水山福昌寺 本尊阿弥陀仏
- 五番 同郷ノ内江ノ熊村右同領内
有住 禅宗
- 一 高巖院 本尊 □□無之
是ノ伊多井迄三町程坂上り松林之内
- 六番 同村
- 一 伊多伊社 本尊六所権現
是ノ津波戸迄壹里ほと上り坂松林之内道悪しく□□かたし
- 七番 山香ノ郷ノ内大造村 無住
- 一 津波戸山水月寺 本尊千手観世音菩薩
是ノ中津尾迄十五丁ほと是も道悪、当山に名水あり
- 八番 同郷ノ内松尾村右同領内
無住
- 一 中津尾山岩屋 本尊薬師如来
是ノ荒石迄壹里ほと、里道
- 九番 同郷ノ内荒石村右同領内
有住 禅宗
- 一 大圓院 本尊阿弥陀仏
是ノ舟迫村迄十八丁ほと山越也
- 十番 同郷之内右同領内岡村
- 一 阿弥陀堂 本尊上同
是ノ川辺迄十八丁ほと山越、谷あり、町

- 通ル
- 十一番 同郷之内右同領内岡村
一 河辺岩屋 本尊薬師如来
是ノ三嶋大明神宮迄貳丁ほとあり
- 十貳番 同郷之内
一 三嶋大明神宮 本尊上同
是ノ地藏堂迄壹里ほと山越
- 十三番 同郷之内川野村日出郷
無住
- 一 地藏堂 本尊上同
是ノ辻小野村迄十八丁ほと坂上り
- 十四番 同郷之内辻小野村同領内 有住
- 一 辻小野山西明寺 本尊千手観世音菩薩
是ノ大谷迄七丁ほと坂上り
- 十五番 同郷之内大谷村右同領内 無住
- 一 大谷山西鏡寺 本尊十一面観世音菩薩
是ノ貫井村迄十五丁ほとあり
- 十六番 同郷之内貫井村右同領也
無住
- 一 貫井山大谷寺 本尊阿弥陀仏
- 十七番 同郷之内ノ道右同領有住神宮寺
- 一 八幡森宮 本尊上同
是ノ地藏堂迄五丁大川渡り
- 十八番 同村
- 一 地藏堂 本尊上同
是ノ(ママ)禅光寺迄十町ほと小河渡り
- 十九番 倉成村右同領也 有住禅宗
- 一 青龍山祥光寺 本尊薬師如来
是ノ毘沙門迄五丁ほと
- 廿番 同村
- 一 毘沙門岩屋 本尊上同
是ノ小武寺迄壹里ほと山道
- 廿一番 同郷之内小武寺村右同領 有住禅宗
- 一 天仲山小武寺 本尊薬師如来
是ノ柚之迫村迄十八丁ほと山道
- 廿貳番 同郷柚之迫村右同領 無住
- 一 地藏堂 本尊上同
是ノ妙善坊迄十八丁山道
- 廿三番 同郷之内妙善坊村同領 無住
- 一 妙善坊 本尊聖観世音菩薩

是ノ熊野山迄廿五丁山越
 廿四番 田渋庄之内熊野村嶋原領
 有住
 一 今熊野山胎蔵寺 本尊不動明王
 是より薬師堂迄廿町山越、当山ニ大日不
 動両部之曼荼羅、神明之御作とも云、一
 字知シ不申候
 廿五番 同庄之内森村右同領也 無住
 一 薬師堂 本尊上同
 是より慈恩寺迄五丁、此堂ニ天神之社有
 廿六番 同庄之内観音堂村右同領 有住 禅宗
 一 稲積山観世音寺 本尊上同
 廿七番 同庄之内真木村右同領也
 一 伏原山東光寺 本尊薬師如来
 是ノ馬城寺迄四町ほと口渡し
 廿八番 同庄城村右同領也 無住
 一 馬城山伝乗寺 本尊阿弥陀仏
 是ノ福寿寺迄廿五丁、当寺にハ牛乗之威
 徳明王不動大日二王皆丈六之木像也
 廿九番 同庄之内陽平村同領也 無住
 一 福寿院 本尊薬師如来
 是ノ嶽迄十町坂上り
 三十番 同村 無住
 一 烏帽子嶽観音堂 本尊十一面観世音菩薩
 是ノ菊山迄壹里ほとあり
 三十一番 同庄之内菊山村御公領也
 無住
 一 聞山岩屋 本尊観世音菩薩
 是ノ釈迦堂迄五丁ほとあり
 三十二番 同庄之内馬城村嶋原領也
 一 釈迦堂 無住 本尊上同
 是ノ間戸大明神迄七町ほと
 三十三番 同庄之内間戸村同領也
 一 二之宮大明神 本尊上同
 是ノ朝日之岩屋迄式丁ほと
 三十四番 同村
 一 朝日岩屋 本尊薬師如来
 是ノ間戸寺迄式丁ほとあり
 三十五番 右同村
 一 朝日山間戸寺 本尊薬師如来

是ハ寺破損して今は在家ニなり、本尊も
 岩屋ニ有、式丁ほと
 三十六番 同村札此所納也 無住
 一 朝日岩屋 本尊薬師如来
 是ノ大門坊迄五丁、此岩屋穴深し、間戸
 村ニ而明松もらひ、ともへ入りて見るへ
 し
 三十七番 同庄之内中村同領 無住
 一 大門坊 本尊阿弥陀仏
 是ノ不動堂迄五丁ほとあり
 三十八番 同村右同領也 無住
 一 不動岩屋 本尊上同
 是ノくわん音寺迄七丁ほと
 三十九番 同村右同領也 無住
 一 妙光山観音寺 本尊上同
 是ノ夕日迄五丁ほと
 四十番 同庄之内右同領也 小崎村
 一 夕日岩屋 無住 本尊阿弥陀仏
 是ノ宝珠院迄三丁ほと
 四十一番 同村右同領也 無住
 一 宝珠院 本尊観世音菩薩
 是ノあたこ山迄拾式丁ほと
 四十貳番 同村はる 有住真言宗山伏
 一 愛宕山大権現社 本尊上同
 是ノ地藏堂迄拾五丁ほど、寔元にて案内
 やとひ候□□□おしむつかし候
 四十三番 同村うつろ木
 一 地藏堂 本尊上同
 是ノろくろ迄五丁程、むつかし案内頼て
 よし
 四十四番 同村うつろ木
 一 轆轤岩屋 本尊観世音菩薩
 是ノくつかけノ岩屋迄壹里ほと山越、む
 つかし案内備ひてよし
 来繩之郷ノ内奥畑村嶋原領 無住寺も本尊もなし
 一 鞍懸山 本尊観世音菩薩
 当寺ハむかしほり崩し城に仕候由
 四十五番 同所寔ニ札打
 一 同山岩屋 本尊妙見大菩薩
 是ノ最勝寺迄壹里山越道なし案内なしに

難儀候
 四十六番 田^(ママ)渋之内小崎村 無住
 一 最勝山岩屋 本尊薬師如来
 是^ス良医岩屋八丁ほど道なし
 四十七番 同村 無住
 一 良医岩屋 本尊薬師如来
 是^ス払ノ堂迄六丁ほど道なし
 四十八番 同村 無住
 一 払阿弥陀堂 本尊上同
 是^ス花井迄十式丁ほど道なし
 四十九番 同庄之内横嶺村同領 無住
 一 花井岩屋 本尊観世音菩薩
 是^ス中ノ西岩屋迄五丁ほど上り坂道なし
 五十番 同庄之内右同村 無住
 一 中ノ西岩屋 本尊観世音菩薩
 是^ス高山寺迄十五丁ほど道なし
 五十一番 同庄之内小田原村 無住
 一 西叡山高山寺 本尊薬師如来
 是^スからすめ迄拾式丁ほど、当山ニ少シ
 引下り石躰之本尊有窠ニ札打
 五十式番 同庄之内横峯村同領 無住
 一 鳥目岩屋 本尊観世音菩薩
 是^ス清瀧岩屋迄十丁ほど下り坂道なし、
 但シ此岩屋も破壊して本尊岩脇寺ニ有、
 札もニ打
 五十三番 同村 無住
 一 清瀧岩屋 本尊観世音菩薩
 是^ス石倉山迄十丁ほど
 五十四番 同村
 一 石倉山清瀧寺 本尊観世音菩薩
 是^ス阿弥陀堂迄七町ほど
 五十五番 同村 無住
 一 阿弥陀堂 本尊上同
 是^スひの山迄四丁ほど
 五十六番 同村 無住
 一 日野山岩脇寺 本尊不動明王
 是^ス岩屋の間なし、当寺破壊して在家なり
 五十七番 右同村是ニ札打 無住
 一 同岩屋 本尊阿弥陀仏
 是^ス薬師堂迄五丁ほど川渡り

五十七番 右同村
 一 薬師堂 本尊上同
 是^ス十王堂迄四丁ほどあり
 五十八番 同村 無住
 一 十王堂 本尊上同
 是^ス清福院迄七丁ほど
 五十九番 右同村
 一 清福院 本尊観世音菩薩
 是^ス穴井堂迄八丁ほど
 六十番 同庄之内相原村同領 無住
 一 穴井堂 本尊地藏菩薩
 是^ス阿弥陀堂迄十式丁ほど山越
 六十一番 右同村也 無
 一 地藏堂 本尊上同
 是^ス阿弥陀堂迄十式丁ほど
 六十式番 同庄之内三野村 無住
 一 阿弥陀堂 本尊上同
 是^ス阿弥陀堂迄廿丁ほど
 六十三番 同庄ノ内三野村 無住
 一 阿弥陀堂 本尊上同
 是^ス不動堂迄七丁ほど
 六十四番 右同村 無住
 一 稻積不動岩屋 本尊上同
 是^ス大明神迄四丁ほど
 六十五番 右同村
 一 三之宮大明神 本尊上同
 是^ス不動岩屋迄十丁ほど、田^(ママ)渋三社八幡ノ
 内三ノ宮
 六十六番 田渋庄ノ内沓懸村右同領也
 一 岩屋堂 本尊不動明王
 是^ス東光寺迄五丁ほど川渡り成り
 六十七番 右同村 無住
 一 東光寺 本尊薬師如来
 六十八番 同庄之内沓懸村木付領也
 一 白髯大明神社 本尊上同
 是^ス清水寺迄六丁ほど
 六十九番 同村 有住禅宗
 一 斑竜山清水寺 本尊千手観世音菩薩
 是^ス阿弥陀堂迄五丁ほど、当寺之塔中ニ宝
 陀寺有、本尊釈迦如来ニ是田原蔵人直平

ト云人改メ禪宗なり

七拾番 右同村同領也 無住
 一 阿弥陀堂 本尊上同
 是ノ八幡宮迄八町程

七拾壹番 同庄之内永松村 無住
 一 八幡宮 本尊上同
 是ノ薬師迄五丁ほど

七拾貳番 同庄之内上番掛村右同領 無住
 一 薬師岩屋 本尊上同
 是ノ八幡宮迄八丁ほど

七十三番 同庄ノ内同領永松村 無住
 一 八幡宮 本尊上同
 是ノ薬師迄十五丁ほど

七十四番 同庄ノ内上番掛村右同領 無住
 一 薬師岩屋 本尊上同
 是ノ地藏寺迄十貳丁ほど

七十五番 同庄ノ内石丸村右同領 有住禪宗
 一 地藏院 本尊上同
 是ノ八ツ面迄八丁ほど

七十六番 同庄ノ内波多方村 無住
 一 八面大明神 本尊上同
 是ノ龍蓮院迄五丁ほど

七十七番 同村 無住 破壊
 一 龍蓮院 本尊観世音菩薩
 是ノ俣見村年の神迄廿丁ほど、山越ちし
 やの木嶽をこす

七十八番 俣見村
 一 歳之神社 無住 本尊上同
 是ノ松林寺迄廿六丁ほど

七拾九番 同村 無住
 一 横嶽山延命寺 本尊薬師并十二神
 是ノ松林寺迄廿六丁ほど

八拾番 武蔵之郷内白木原村
 一 大原山松林寺 本尊薬師如来
 是ノ観音堂迄十町ほど

八十壹番 同村
 一 観音堂 本尊上同
 是ノ龍花院迄壹里ほど、山越よく尋て可越

八十貳番 田洪庄ノ内小野村右同領 有住禪宗

一 龍花院 本尊弥勒菩薩
 是ノ薬師堂迄拾八丁本水と云所也

八十三番 同村本水 無住
 一 薬師堂 本尊上同
 是ノ落村くわん音堂迄壹里ほど、山越よく
 尋てこすへし

八十四番 田洪庄ノ内路村嶋原領
 一 観音堂 無住 本尊上同
 是ノ富貴寺迄八町ほど

八十五番 同村 有住
 一 蓮花山富貴寺 本尊阿弥陀如来
 是ノ地藏堂迄廿五丁ほど

八十六番 同村
 一 地藏堂 本尊上同
 是ノ長福寺迄廿町ほど山越川渡り

八十七番 同庄ノ内小田原村 無住
 一 高嶽山長福寺 本尊釈迦如来
 是ノ白鳥大明神迄三町ほど

八十八番 同村
 一 白鳥大明神 本尊上同
 是ノ塔の御堂迄五町ほど川渡り有

八拾九番 来繩庄ノ内内能名迄小田原ニ入
 一 塔之御堂 本尊地藏菩薩
 是ノ轟の岩屋迄三町ほどあり

九拾番 同村 無住
 一 轟之岩屋 本尊薬師如来
 是ノ河辺迄七町ほど川渡り

九拾壹番 同村 無住
 一 河辺岩屋 本尊薬師如来
 是ノ不動堂迄六町ほど川渡り

九拾二番 同郷ノ内佐野村 無住
 一 不動堂 本尊不動明王
 是ノ八王子迄十五丁ほど

九十三番 同郷之内佐野村 無住
 一 八王子社 本尊上同
 是ノ見福院迄五丁ほど

九十四番 同村 無住
 一 見福院 本尊地藏菩薩
 是ノろくろ岩屋迄十丁ほど上り坂

九十五番 同村 無住

一 轆轤岩屋 本尊薬師如来
 是ノ大折山迄五丁ほど
 九拾六番 同郷之内築地村 有住禅宗
 一 大折山報恩寺 本尊観世音菩薩
 是ノ養泰院迄十町ほど
 九十七番 同村
 一 養泰院 本尊釈迦如来
 当寺ニ神后皇后之石塔有
 是ノ若宮八幡宮迄廿町ほど川渡り有
 九十八番 同郷之内高田村 無住
 一 若宮八幡社 本尊上同
 是ノ来迎寺迄十五丁ほど芝崎町ニ入ル
 九十九番 同村芝崎村
 一 海見山来迎寺 本尊阿弥陀如来
 是ノ光明寺迄六町ほど
 百番 同郷ノ内田福寺村 無住山伏
 一 玉井山光明寺 本尊観世音菩薩
 是ノ釣蔵院迄廿町ほど川渡り
 当寺如意口酒たまふ井口あり
 百壹番 同庄ノ内森村同領
 一 釣蔵院 本尊観世音菩薩
 是ノ宗佐院迄七町ほど
 百貳番 同村 有住禅宗
 一 宗佐院 本尊観世音菩薩
 是ノ薬王寺迄六丁ほど川渡り
 百三番 同村
 一 薬王寺 本尊薬王菩薩
 是ノ知恩寺迄三丁ほど
 百四番 同郷ノ内知恩寺村 無住
 一 良薬山知恩寺 本尊薬師如来
 是ノ鼻津岩屋迄廿丁ほど道筋不知候間よ
 く尋也
 百五番 同郷ノ内鴨尾村
 一 鼻津岩屋 本尊薬師如来
 是ノ弥勒院迄十八丁ほど川渡り
 百六番 都甲庄ノ内払田村 無住
 一 弥勒院 本上同
 是ノ妙覚寺迄貳丁ほど
 百七番 同庄ノ内荒尾村 有住禅宗
 一 麟治山妙覚寺 本尊阿弥陀如来

是ノ堀岩屋迄五丁ほど川渡り
 百八番 同庄ノ内大力村 無住
 一 堀岩屋 本尊普賢菩薩
 是ノ龍雲寺迄六丁ほど川渡り
 百九番 同庄ノ内築地村 無住
 一 鼻頭山龍雲寺 本尊観世音菩薩
 是ノ八幡迄五丁程、当寺改高栄山龍雲寺
 ト成リ
 百拾番 同村
 一 八幡別宮 本尊上同
 是ノ観音堂迄六丁ほど
 百壹番 松行村 無住
 一 観音堂 本尊上同
 是ノ矢立大明神迄五丁ほど川渡り
 百拾貳番 同庄ノ内新庄村 無住
 一 矢立大明神 本尊上同
 是ノ妙見迄五丁ほど川渡り
 百十三番 同庄ノ内大力村 無住
 一 妙見大菩薩社 本尊上同
 是ノ三光院迄六丁ほど
 百拾四番 同庄ノ内梅野木村 有住 (このくび)
 一 三光院 本尊阿弥陀仏
 是ノ観音堂迄十五丁ほど
 百拾五番 同村
 一 観音堂 本尊上同
 是ノ地藏堂迄十五丁ほど
 百拾六番 同庄ノ内一畑村 無住
 一 地藏堂 本尊上同
 是ノ大内岩屋迄廿五丁ほど山道あり、よく
 人にたつねへし
 百拾七番 同村 無住
 一 大内岩屋 本尊観世音菩薩
 是ノ万福寺迄廿町ほど
 百拾八番 同村
 一 加礼川山万福寺 本尊普賢菩薩
 是ノ屋山迄廿五町ほど上り坂なり
 百拾九番 同村 有住
 一 屋山長安寺 本尊千手観音
 是ノ天念寺迄十八丁坂下り当寺太郎天童
 百廿番 同庄ノ内長岩屋村 有住

一 長岩屋山天念寺 本尊観音
是ノ小両子迄四丁ほと上り坂林之内
百貳拾壹番 同村 無住

一 小両子岩屋 本尊阿弥陀仏
是ノ龍門迄五丁ほと竹藪ノ内
百貳拾二番 同村 無住

一 龍門岩屋 本尊観音
是ノ多門院迄廿八丁ほと山越
百廿三番 真玉ノ庄黒土村 有住

一 多門院 本尊馬頭観音
是ノ四王迄当院ニ小岩山かけもち
百廿四番 同村 無住

一 四王岩屋 本尊四天王
是ノ小岩屋山迄六丁ほと
百廿五番 同庄ノ内黒土村 此寺多門院ノ持

一 小岩屋山無動寺 本尊薬師如来
是ノ西弘迄廿貳丁ほと
百廿六番 同庄ノ内城前村 無住

一 西弘弥勒院 本尊上同
是ノ不動堂迄廿五丁ほと
百廿七番 同庄ノ内大岩屋村 無住

一 不動堂 本尊上同
是ノ応曆寺迄三町ほと
百廿八番 同庄ノ内大岩屋村 有住

一 大岩屋山応曆寺 本尊千手観音
是ノ根曳迄壹里ほとに成
百廿九番 白野庄ノ内山畑村 無住

一 根曳堂 本尊地藏菩薩
是ノ寿福寺迄六丁ほと
百三十番 同庄ノ内小畑村 有住禅宗

一 赤松山寿福寺 本尊観音
是ノ間簾迄五丁ほと
百三十一番 同村 無住

一 間簾岩屋 本尊阿弥陀仏
是ノ后之塔迄七丁、此尾辻ニ開山之塔有り
百三十貳番 同村 無住

一 后之塔 本尊上同
是ノ三王迄十八丁ほと下り坂川渡り
百三十三番 香々地庄ノ内長小野村

一 山王権現社 本尊上同

是ノ今井迄十町ほと
百三十四番 同村 無住

一 今井岩屋 本尊薬師如来
是ノ夷山迄廿丁程、夷村内儀耆岩屋本尊
不動明王并ニ熊野権現川ノ西ノ山本林道
上て拜所あり
百三十五番 同庄ノ内夷村 有住

一 夷山靈仙寺 本尊千手観音
是ノ今ゑびす迄三町ほと
百三十六番 同村

一 今夷岩屋 本尊上同
是ノ焼尾迄壹町程
百三十七番 同村 無住

一 焼尾阿弥陀堂 本尊上同
是ノ西方山迄壹里ほと藤が谷を越
百三十八番 西方寺村 有住

一 西方山清浄光寺 本尊観世音菩薩
是ノ大藤ノ岩屋迄三十町ほと不案内にて
はなりかたしよくへたつねてよし
百三十九番 同村

一 大藤岩屋 本尊阿弥陀如来
是ノ大不動迄十町程道なき所少有
百四十番 伊美庄ノ内千灯村 無住

一 大不動岩屋 本尊上同
是ノ尻付迄五丁ほと
百四十壹番 同村 無住

一 尻付岩屋 本尊六観音
是ノ千灯寺迄拾町ほと川渡り
百四十貳番 同村 有住

一 補陀落山千灯寺 本尊千手観音
是ノ五つノ岩屋迄七町上り坂当寺ニ仁聞
菩薩御入定之塔有
百四十三番 無^(ママ)

一 五ツ岩屋 本尊不動明王
是ノ平等寺迄一里当山岩屋仁聞菩薩不動
之修行至り所也^(ママ)
百四十四番

一 野田山平等寺 本尊釈迦文仏^(ママ)
是ノ万徳寺迄十町ほと

百四十五番 有住
 一 眉宮山萬徳寺 本尊観音
 是ゞ胎蔵寺迄壺里山越

百四十六番 浄土宗
 一 天治山胎蔵寺 本尊阿弥陀仏
 是ゞ牛頭之宮迄壺里ほと

百四十七番 来浦
 一 牛頭天王社 本尊上同
 是ゞ金剛寺迄拾町ほと

百四十八番 有住禅宗
 一 大宝山金剛寺 本尊釈迦(ママ)文仏
 是ゞ大聖寺迄壺町ほと

百四十九番 有住
 一 治地山大聖寺 本尊観世音菩薩
 是ゞ長福院迄拾式丁ほと

百五十番
 一 長福院 本尊観世音菩薩
 是ゞ岩戸寺迄廿町ほと

百五十一番 有住
 一 石立山岩戸寺 本尊薬師如来
 是ゞ三十払迄拾町ほと、当寺経之岩屋鬼
 塚甘露水有、こしきの岩屋有

百五十式番 無住
 一 三十払岩屋 本尊上同
 是ゞ文殊仙寺迄廿五町山越

百五十三番 藁蓑村 有住
 一 峨眉山文殊仙寺 本尊上同
 是ゞ大恩寺迄壺里、当山ニ西裏五ヶ所の
 仙有、普賢堂あり

百五十五番 中村 無住
 一 喜福院 本尊阿弥陀如来
 是ゞ吉祥寺迄川渡り

百五十六番 同村 無住
 一 吉祥寺 本尊千手観音

百五十七番 見地 有住禅宗
 一 玉林寺 本尊地藏菩薩
 是ゞ東光寺迄十町ほと

百五十八番 同村
 一 東光寺 本尊阿弥陀仏
 是ゞ成仏寺迄廿五丁ほと

百五十九番 成仏村 有住
 一 龍花山成仏寺 本尊阿弥陀仏
 是ゞ獅子天童社迄五丁ほと

百六拾番 同村
 一 獅子天童社 本尊上同
 是ゞこくうぞう迄十三丁ほと

百六拾壹番 同村 無住
 一 虚空蔵岩屋 本尊上同
 是ゞ高良山迄十町ほと山越

百六拾貳番 高良村 有住
 一 高良山帝釈天童社 本尊上同
 是より大嶽山迄八丁山越、此高良山ハ高
 山ニ而上りかたし山神に札打へし也

百六拾三番
 一 大嶽山神宮寺 本尊薬師并十二神
 是より毘沙門迄七町ほと山越、道知(ママ)しか
 たし

百六拾四番 同村 無住
 一 毘沙門岩屋 本尊上同
 是ゞ行入寺迄七町ほと山越

百六拾五番 行入村 有住
 一 参社山行入寺 本尊不動明王
 是ゞ浄土寺廿三町ほと

百六拾六番 岩屋村 有住禅宗
 一 岩屋山浄土寺 本尊観世音菩薩
 是ゞ興導寺壺里半ほと

百六拾七番 興導寺村 有住
 一 興満山興導寺 本尊釈迦如来
 是ゞ八幡

百六十八番 同村
 一 桜八幡宮 本尊上同
 是ゞ小城山迄式里半ほとあり

百六拾九番 武蔵郷ノ内小城村 有住
 一 小城山東光寺 本尊千手観音菩薩
 是ゞ八幡迄廿町ほと

百七十番 三井寺村 無住
 一 椿八幡宮 本尊上同
 是ゞ如意院迄廿五丁ほと

百七十壹番 手野村 有住禅宗
 一 如意院 本尊不動明王

是の報恩寺迄十式丁川渡り
 百七十式番 麻田村 有住
 一 金剛山報恩寺 本尊観音菩薩
 是の丸小野寺迄壺里ほと、当寺にて仁聞
 菩薩御両親御眷属等之御供養有之所也
 百七十三番 丸小野村 有住
 一 医王山丸小野寺 本尊薬師仏
 是の両子寺迄壺里半ほと
 百七十四番 両子村
 一 足曳山両子寺 本尊 薬師仏
千手観音菩薩
 是の走り水迄五丁ほと
 百七十五番
 一 走水観音堂 本尊上同
 是の宝立山迄壺里ほと山越
 百七十六番
 一 宝立山法恩寺 本尊千手観音
 是の薬師堂迄拾式丁ほと
 百七十七番 中野村 無住
 一 薬師堂 本尊上同
 是の護聖寺迄十式町ほと
 百七拾八番 久末村 有住禅宗
 一 久末山護聖寺 本尊観世音菩薩
 是の杉山迄廿五丁ほと山越
 百七拾九番 □□杉山村 有住
 一 杉山瑠璃光寺 本尊薬師仏
 是のかけひ迄廿五丁ほと
 百八拾番 かけひ村 無住
 一 懸樋山浄光寺 本尊薬師如来
 是の西山迄壺里ほと川渡り
 百八拾壺番 成久村 無住
 一 西山成久寺 本尊毘沙門天
 是の内迫迄十八町ほと
 百八十式番 内迫村 無住
 一 内迫山覚安寺 本尊阿弥陀如来
 是の奈多村迄壺里ほと
 百八拾三番 奈多村 無住
 一 奈多八幡宮 本尊上同
 是の報恩寺迄八町ほと
 百八十四番 同村 有住禅宗
 一 報恩寺 本尊如意輪観世音菩薩

是の横城山迄廿町ほと
 百八拾五番 横城村
 一 横城山東光寺 本尊薬師十二神
 是二而札打納也
 惣札所百八拾三ヶ所
 右番付違ひ御座候へ共、本書駈と知り不申候違
 ひ□
 内
 六拾式ヶ所 国崩時入来ル分
 百式拾壺ヶ所 空心改加ル分
 義統公付六郷破却

2 富貴寺とその周辺の石造物

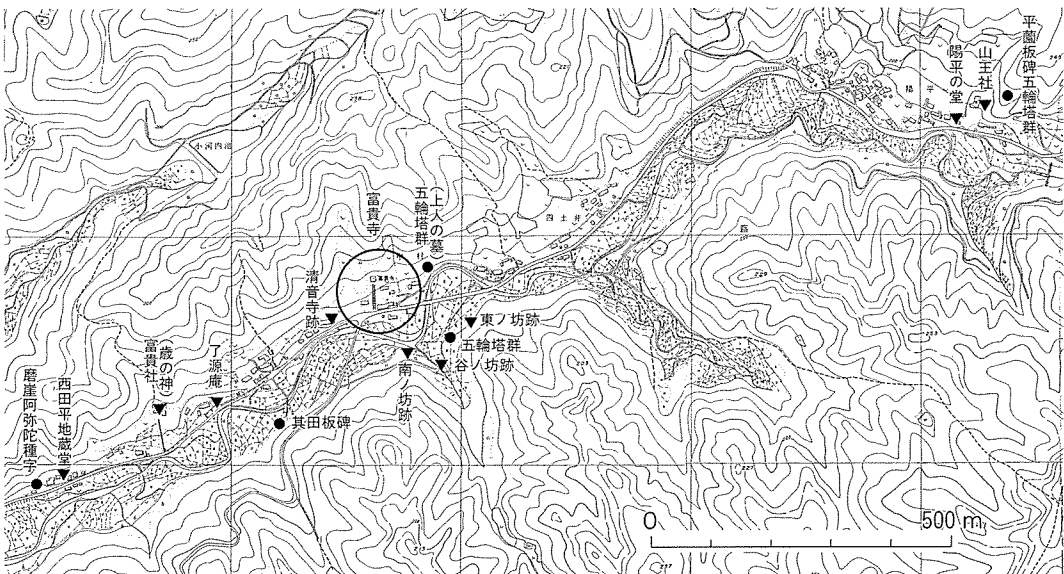
—中世落谷における信仰—

平安後期の12世紀後半に宇佐八幡大宮司の祈願寺として創建された富貴寺も、鎌倉後期、13世紀後半には、その経済基盤である落谷一帯の糸永名が、蒙古合戦の恩賞として肥前国御家人曾祢崎氏の領有となるなど、武家方の勢力の及ぶところとなった。続く南北朝の動乱期には、一時的ではあるが富貴寺そのものが筑後国御家人調幸実の支配を受け、また「高山末寺」として六郷山組織の中に組み込まれ、宇佐宮の直接の手を離れたのもこの頃である。南北朝以後の中世後半期の落谷は、地頭曾祢崎氏と縁戚関係を結んだ田原氏が、落中村に政所を置き、実質上の支配権を確立していたと考えられる。

このような中世の富貴寺および落谷における仏教信仰のあり方を示すものに、同寺境内とその周辺に伝わる一連の石造物群がある。以下ここでは、それら石造物を通して、中世のこの地域に展開した信仰の特色を概観する。

(1) 富貴寺笠塔婆と浄土信仰

富貴寺境内所在の石造物としては、大堂周囲に仁治2年(1242)を最古銘とする笠塔婆5基のほか、大小2基の国東塔(小型のものに慶長8年<1603>の墨書銘がある)、大堂東側に一群をなす五輪塔63基(うち一石五輪塔が6基)がある。また、石仏としては、大堂内に応安元年(1368)銘の地藏石仏があり、大堂西側に地藏・十王・脱衣婆石仏12軀がある。これら石仏は、いずれも古くは落村鎮守歳神社(現富貴社)の近隣にあった地藏堂から移されたものという。



第17図 落谷主要部の社寺・堂・坊跡および石造物の分布 ▼ 神社・寺院・堂・坊跡 ● 石造物群

○笠塔婆①
サ
(観音)

造立者広増

キリーク 仁治二年辛丑八月十二日
(阿弥陀) (1241)

サク 彼岸第二日
(勢至)

○笠塔婆②
バク・ウン・マン
(釈迦) (音観) (文殊)

実阿弥陀仏

サ 造立者阿仏坊広増
(観音)

キリーク 仁治四年卯月廿五日
(阿弥陀) (1243)

サク 右志者極楽往生也
(勢至)

バン・バイ・キャ
(金大日) (薬師) (十一面)

長円

○笠塔婆③

カーン・マーン
(不動)

造立者広増
文永五年
(1268)

二月八日

笠塔婆④
アン
(音観)

造立者広増
文永五年戊辰
(1268) 二月八日

バク
(釈迦)

右為志者往生極楽

マン
(文殊)

○笠塔婆⑤
サ
(観音)

造立者広増

キリーク 文永五年戊辰二月八日
(阿弥陀) (1268)

サク 彼岸第五日
(勢至)

○笠塔婆⑥ (現別府市美術館所在)

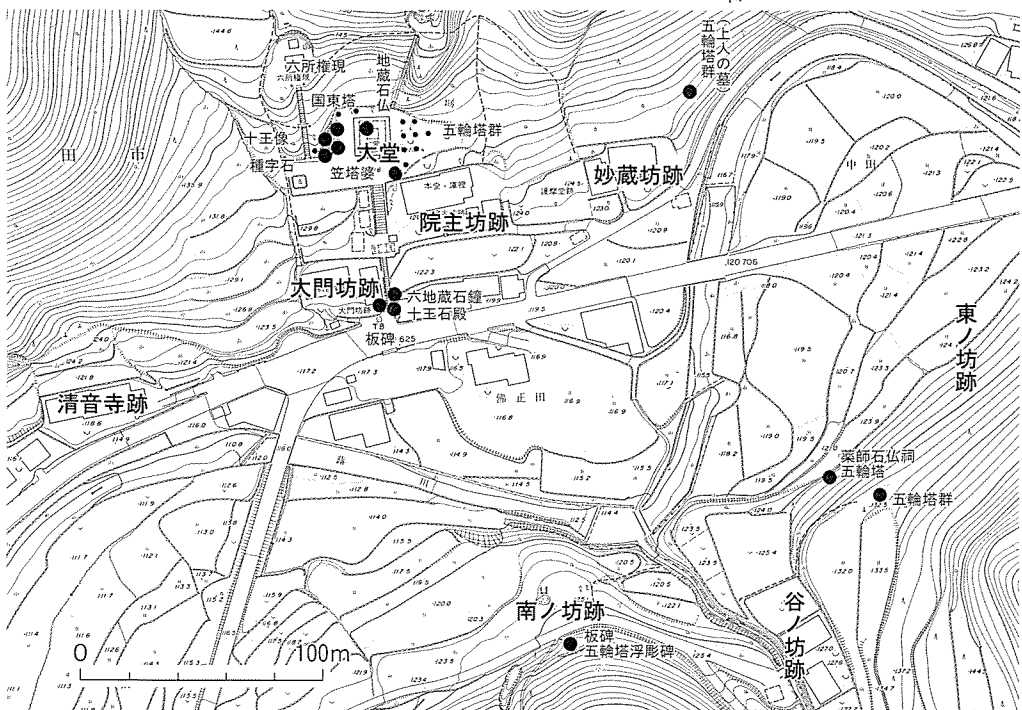
バク・キリーク 文永六年己巳四月廿五日
(釈迦) (阿弥陀) (1269)

造立者増広増

○地藏石仏

乙月
願主王盛久
一日
応安元年戊申
(1368)

右志者為往生極楽



第 18 図 富貴寺と六坊周辺の石造物

笠塔婆の種字に阿弥陀如来ないし阿弥陀三尊が多いこと、造立の趣意が極楽往生を願ったものであることなど、これらが基本的には浄土信仰に根ざしていることは明らかである。特に笠塔婆②の「実阿弥陀仏」という阿弥号や「阿仏坊広増」という僧名など、時衆僧侶を思わせるが、この年代では考えられない。ただ、種字に阿弥陀以外の釈迦三尊や大日・薬師・十一面観音、さらには不動明王をかかげるなど、雑多な諸仏への信仰、密教との混淆した状況が窺え、あるいは密教僧でありながら自らも「南無阿弥陀仏」の号を名のり、阿弥陀信仰を鼓吹した俊乗房重源の流れを汲む僧侶達、ないしは同じく阿弥号を名のった集団に専修念仏を唱導した法然房源空の一門があり、いずれとも決めがたい。いずれにせよ、平安時代以来の天台六郷山の信仰圏の中にあつて富貴寺を中心とするこの地域は、鎌倉後期のこの時期にあつても、伝統的に浄土信仰ないし念仏系の信仰が盛行した場所であつた。

以上のほか、富貴寺境内所在の石造物として、同寺門前石段登り口に延文4年(1361)銘の種字板碑と十王石殿2基、六地藏石幢がある。

○板碑 右志者祐禅大徳
 アーク 延文六年七月廿五日 敬白
(銘日大)
 七季(年の異体字)忌造立如件

祐禅大徳は、文和2年(1353)筑後御家人調幸実が大堂の修理を行った際の学頭を務めた人物であり、その7回忌の供養碑である。

十王石段は、入母屋の屋根に槿型・懸魚を刻出した丁寧かつ古式な造りを示す。六地藏石幢は、前記地藏・十王石仏等とともに、富貴社近くにあつた地藏堂に旧在したものである。

(2) 富貴寺六坊と石造物

往時の富貴寺には、東之坊・中ノ坊・谷之坊・南ノ坊・大門坊・妙蔵坊と称する六坊があつた。このうち中ノ坊を除く五坊は現在もその遺称地が知られ(第18図)、周辺にいくつかの石造物群が確認される。富貴寺とは菰川を挟んだ対岸にある東ノ坊跡は現在杉林になっており、数段の石垣積があり、付近に五輪塔数基が散乱する。谷ノ坊跡は民家となっているが、近くに薬師石仏の石祠や近代墓地があり、いずれにも五輪塔数基が所在する。南ノ坊跡には、現在江戸期の地藏石仏が立っているが、隣



富貴寺笠塔婆



富貴寺十王石殿

接の墓所に「南坊賢清」による正徳元年（1711）建立の「大乘妙典一字一石如法塔」のほか、享保16年（1731）、宝暦11年（1761）没年銘の南ノ坊歴世の墓塔があり、さらには阿弥陀種字板碑（南北朝期）、および五大種字を薬研彫りにした五輪塔浮彫碑（戦国期）が所在する。

大門坊跡は富貴寺門前、妙蔵坊跡は同寺東側の民家の屋敷地が比定される。妙蔵坊跡の裏山山林内には、通称「上人の墓」と呼ばれる場所があり、五輪塔20基（うち一石五輪塔が8基）が群をなす。このうち一石五輪塔2基に五大種字四方門が陰刻され、うち一基は種字を平彫りにするなど古式を示す。これら五輪塔群は、富貴寺住職と妙蔵坊の双方で代々守り伝えているという。

（3）其ノ田板碑と二つの地蔵堂

富貴寺門前から落川をやや下った左岸、字名「其ノ田」（ソノダは「菌田」か）と呼ばれる水田の脇に種字板碑2基が立つ。

○板 碑①

サ
（観音）

キリーク 建武元年甲戌十一月廿二日

（阿弥陀）

地蔵堂講衆等各敬白

サク
（勢至）

○板 碑②

バン・アン・マン
（金大目） （音賢） （文経）

建武元年甲戌八月廿四日

乙房尼法阿

所奉訪聖靈沙弥道安

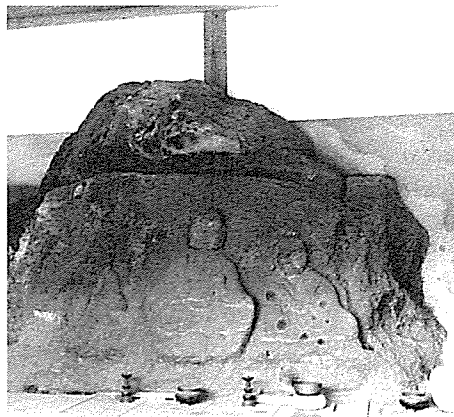
沙弥明道

板碑①は地蔵堂を拠点とする講衆団により造立されたもので、板碑②は乙房尼法阿と称する女性が願主となって今は亡き道安・明道二人の菩提を弔うために造立した追善供養碑である。両者同じ建武元年（1334）に3ヵ月の間をおいて建立され、何らかの関係が考えられるが、「乙房尼法阿」は時衆の女性に対する法名であり、あるいは地蔵堂講衆は尼法阿が所属した時衆集団である可能性が高い。

この地蔵堂については、ここから400mほど下った字西田平に地蔵堂と呼ばれる小堂があり、地蔵像を左右から僧形の男と俗形の女が合掌鑽仰する姿を浮彫りにした磨崖仏が祀られている。あるいは、前述の富貴寺大堂所在の応安元年（1368）銘の地蔵石仏、同境内所在の地蔵・十王・脱衣婆像、六地



其ノ田板碑



西田平地蔵堂磨崖仏



第19図 磨崖阿弥陀種字(拓影)

蔵石幢が旧在したという地藏堂（柏木落村の『落村故事録』〈天保8年・1837〉にも記載される）があり、いずれが該当するかは検討を要する。一般には阿弥陀如来に対する帰依、専修念仏を標榜する時衆であるが、実際にはかなりの雑信仰がみられ、特に地藏信仰については多くの時衆道場には地藏菩薩の像が安置されていたという。いずれにせよ、其ノ田板碑にいう「地藏堂講衆」こそ、これら地藏堂を本拠とする時衆集団ではなかったろうか。ちなみに、西田平の地藏堂の下手の山際に、阿弥陀如来の種字（キリク）を大きく葉研彫り（第19図）にした巨石があり、前面には五輪塔数基が散乱する。種字はその雄渾な書体から南北朝期を下らぬものであり、これも一連の時衆による浄土信仰の所産であるのかも知れない。

（4）平藪板碑・五輪塔群

落谷の最奥部、陽平集落にある山王社の裏山の斜面に種字板碑5基を主体に五輪塔数基（うち1基が一石五輪塔）の残欠が散乱する。板碑5基はいずれも安山岩製、現高1～1.5mの板碑としては中規模のもので、釈迦・地藏ほかの種字を葉研彫り、あるいは墨書するほか、紀年銘を陰刻するものもある。

○板 碑① 高104.5cm ○板 碑② 折損、復元高150cmほど
バク 建 二 八 廿 カ 建武四十月廿四日
(釈迦) (1335) (地藏) (1337)
大 別

釈迦種字を葉研彫りする板碑①の陰刻銘「建二八廿」は「建武二年八月廿日」を略記したもの。「大別」は意味不詳。板碑②は地藏種字を葉研彫りするが、以前確認された「建武四」の年号は、破損進行のため今回確認できなかった。

これら石造物群の所在する陽平地区は、ここから峠を挟んだ北側、加礼川の谷筋の六郷山屋山領と境を接し、富貴寺を中心とする落谷、つまり糸永名の東の境界に位置する。『落村故事録』によれば、当地区の信仰施設としては、鎮守山王社以外に、古くは玉泉庵（富貴寺末、天台宗）、善修庵（禅宗）、専念寺（浄土真宗）の3カ寺が所在したことが知られる。このうち、富貴寺の末寺である玉泉庵は山王社の境内西側にあったとされ、当該板碑・五輪塔群は山王社およびその神宮寺である同寺に関わるものであり、ひいては富貴寺の信仰圏の結界としての意味をもっているのではなかろうか。

以上、富貴寺およびその周辺の落谷に所在する中世石造物とそこに現われた中世の仏教信仰について概観した。前述のように、鎌倉末期、富貴寺は創建者である宇佐宮の手を離れて六郷山寺院集団に組み込まれたが、基本的には平安末期の創建期の富貴寺における浄土信仰の伝統が、中世にあってもよく継承されていたとは言えそうである。天台教学の中から派生した浄土信仰が、中世仏教の庶民化にともなって、六道思想と結び付き、あるいは専修念仏である浄土宗や時宗などへと発展・変貌して行った軌跡をこれら多くの石造物は物語っている。

大分県立歴史博物館報告書第5集

六郷山寺院遺構確認調査報告書IX

平成13年3月31日

発行 大分県立歴史博物館

〒872-0101 大分県宇佐市大字高森字京塚

印刷 明治印刷株式会社

宇佐市大字長洲607



